

兵庫が育む ころ豊かで自立する人づくり

兵庫教育 12月号

2021 No.850

特集

共生社会の実現に向けた 特別支援教育の充実

論文

共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実

～「双方向」をキーワードとして～

（奈良学園大学 人間教育学部 准教授 岡野 由美子）

教育実践

各校の実践より（宍粟市立波賀小学校、丹波篠山市立篠山中学校、県立和田山特別支援学校）



「くましろ祭」でのリレーの様子

～南あわじ市立神代小学校～



月刊「兵庫教育」

URL:<https://www.hyogo-c.ed.jp/~kenshu/>

発行：兵庫県教育委員会
編集：兵庫県立教育研修所



豊かな心の育成

～自分の思いや考えを言葉にして伝える～

南あわじ市立^{じんだい}神代小学校

南あわじ市立神代小学校は、島内最大の三原平野の東南部に位置している。校区は神^{くましろ}稲の地名が示すように、神々に供える稲づくりの地として古代から農業を中心として栄え、各地に数多くの伝説や民話が残っている。

めざす児童像に「自分を大切にする子」「考える子」「心と体をきたえる子」を掲げ、全ての教育活動を通して、自ら考え、主体的に判断し、互いのよさを尊重しながら行動する力の育成に努めている。



◆思いや考えを発表する「朝の会」

朝の会では、子どもたちが自分の思いや考えを発表し、質問に答える時間を設けている。1年生のときからみんなの前で話す、という経験を積み重ね、6年生になる頃には、授業で疑問に思ったことをきっかけに、さらに深く追究した結果を発表できるようになる。「神代」の昔の呼び名である「くましろ」という地名のルーツを歴史の授業で学び、それをきっかけに自分の名字の由来に関心を持った児童は、曾祖父への取材をもとに発表を行った。6年間の継続した取組によって、子どもたちは「なぜ」を大切にして考えを深め、相手に伝わりやすい表現を工夫する姿勢を身に付けていく。



▲「朝の会」で自分の考えを発表する様子

◆子どもたちが自ら企画した「くましろ祭」

「くましろ祭」は、「新型コロナウイルス感染症拡大のために、一度は中止の決定がなされた運動会を何とか実施したい」という子どもたちの熱い思いから、昨年度より始まった行事である。

6年生を中心に結成された実行委員会が核となり、全校児童で決めた「あたり前を大切に」というテーマのもと、プログラム内容や練習計画から感染症対策に至るまで、全てを自分たちで発案した。実行委員が職員会議に出席し、自分たちの考えを丁寧に先生たちに伝える場面もあったという。

子どもたちが「くましろ祭」をやり遂げたことは、「自分の思いや考えを言葉にして伝える」ことを重んじる神代小学校の教育の一つの大きな成果である。



▲「くましろ祭」のテーマ「あたり前を大切に」



フレッシュ・インタビュー（第7回）

相手の視点に立って、ていねいな仕事を

インタビューー 県立阪神昆陽特別支援学校

しまづ あすか
事務職員 島津 明日香



*2017年4月の採用で、現在5年目。県立西宮今津高等学校で3年間勤務した後、現任校へ異動。
今年度の主な担当業務は給与、服務、旅費関係事務。（インタビュー実施日：2021年9月15日）

■まず、事務職を志すことになった動機について教えてください。

私は大学の教育学部の出身で、もともとは小学校の教員を志望していました。実習やボランティアで小学校へ行き、その学校の先生方と話をしていたときに、「教員という仕事は、子どもの成長を支援するというやりがいのある仕事だけど、意外と事務仕事が多く大変なんですよ」と言われたことが心に残りました。

そこで事務職の立場から、先生方が多くの時間を割いている事務仕事を軽減することができれば、子どもたちと向き合う時間が増え、間接的に子どもたちの学びを支えることができると思い、この仕事を選びました。

■現在の仕事のやりがい、喜びは何ですか？

先生方からの「いつもありがとう」等の何気ない一言が本当に嬉しいです。また、大切な事務の仕事のひとつである窓口対応において、以前は、か細い声で要件を伝えていた生徒が、ある日、ドアをノックして、大きな声でしっかりと要件を伝えることができるようになった光景を目にして、生徒の成長を身近に感じられる素晴らしい仕事だと実感しました。毎日、誰かが事務室にやって来るので、その対応もなかなか楽しいものです。

■仕事での失敗談等について教えてください。

勤務当初は電話対応で苦労しました。私が学生の時の連絡手段はSNSが中心で、電話はほとんど使っていませんでした。そのため、外部から掛かってくる電話対応の難しさを実感しました。外部からの電話は、まず事務室が対応します。その対応ひとつで、その学校の印象が決まってしまうこともあります。相手からの質問に関する知識が不十分で、即座に対応ができず相手を待たせてしまい、ご迷惑をおかけした経験があり、自分の力不足を感じました。適切な対応ができるよう日々精進していきたいと思っています。

■休日などにリフレッシュする方法について教えてください。

テニスで汗を流すことです。実は、社会人

になってから、初めてのことに挑戦したいという思いを持っていたため、初心者コースのあるテニススクールに入りました。学生の時、友達がテニス部に入っており、すごく楽しそうだったので、自分も機会があればテニスをしてみたいと思っていたことも理由のひとつです。現在、週1回、スクールに通って、ボールを打つことが気分転換になっています。もう少し上達したら市の大会に出場し、1勝することをめざしています。

■最後に、現在の目標を教えてください。

現在、給与を担当している関係で、税金、保険、共済、給付金等、様々な質問が先生方から寄せられます。そこで、自分の知識をさらに広げ深めるため、ファイナンシャルプランナーの資格を取得するための勉強を始めました。

今年で採用5年目ですが、まだまだ事務処理のスピードが遅いため、もっと効率的に仕事をこなせるようになることも目標です。「これがあったら便利だな」と思うものを作成し、スムーズな対応を心がけたいです。例えば、産休、育休等に入ったときの事例別の処理方法をまとめておけば、先生方にもわかりやすいと考えています。また、大前提として、事務の仕事では根拠をおさえておかないといけないので、法律、条例、規則等、時間をかけてしっかりと知識を身につけるつもりです。

さらに、生徒たち、先生方、保護者の方、地域の方等、様々な人たちと接する際に、相手の視点に立って、ていねいな仕事をすることを目標として、日々の仕事に取り組んでいます。



▲ 給与関係の書類を確認している様子

特集

共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実

共生社会の実現に向けて、全ての学校園や学級に障害のある幼児児童生徒が在籍することを前提に、一人一人の教育的ニーズに応じ、自立と社会参加を見据えたきめ細かで適切な教育的支援について考えます。

学校訪問

豊かな心の育成

～自分の思いや考えを言葉にして伝える～

南あわじ市立神代小学校

フレッシュ・インタビュー

相手の視点に立って、ていねいな仕事を

県立阪神昆陽特別支援学校 事務職員

しまづ あすか
島津明日香

1

論文

共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実

～「双方向」をキーワードとして～

奈良学園大学 人間教育学部 准教授

おか の ゆ み こ
岡野由美子

4

教育実践

誰もが安心して生活できる学校にするために

宍粟市立波賀小学校 教諭

いの こ
猪子かおり

8

ユニバーサルな学校づくり

～小・中学校の連携を通じて～

丹波篠山市立篠山中学校 教諭

さいとう ゆみ え
齋藤 弓絵

12

共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実に向けて

～高等学校から特別支援学校へ、健常者から障害者へ～

県立和田山特別支援学校 教諭

たぶち しんじ
田淵 伸司

16

授業づくり（児童が主体的に学ぶ外国語・外国語活動の授業づくり）

5 領域の指導 ～話すこと（やり取り）～

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授

よし た たつひろ
吉田 達弘

24

SDGsの視点からの学び

SDGs（持続可能な開発目標）からの学び

東京農工大学 農学研究院 教授

あさおか ゆきひこ
朝岡 幸彦

26



川西市黒川地区 雪の里山

授業実践

国語科の授業実践 宮沢賢治「永訣の朝」
～複数テキストを読み取る～

県立宝塚東高等学校 教諭 たかやしきあみ
高屋舗亜望 30

働きがいのある学校づくりに向けて

学校事務の業務改善に向けて
～姫路市立小中義務教育特別支援学校事務職員協議会活動の取組から～

姫路市立広峰小学校 学校副主幹 いわみまりこ
岩見万里子
姫路市立野里小学校 学校副主幹 まえひがしみなこ
前東美奈子 34

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導（第98回）
「教育・家庭・福祉の効果的な連携」～伊丹市の事例～

伊丹市立鴻池小学校 校長 みやたにかずのり
宮谷 和教 37

研修最前線レポート

(小) 国語科授業実践講座
～「読むこと」領域の授業づくり～

県立教育研修所 義務教育研修課 38

コラム「教育の接点」

ひまみ

神戸新聞社特別編集委員兼論説顧問 はやしよしき
林 芳樹 40

編集後記

トピックス P20～23

(但馬) 香美町立村岡小学校
支え合い、認め合う学校づくり……………22

(播磨東) 小野市立大部小学校
命を育む活動……………21

(播磨西) 姫路市立高浜幼稚園
「学びの種」を捉える……………22

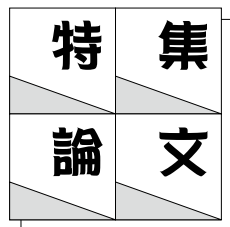
(県立) 県立有馬高等学校(定時制課程)
自己有用感の育成に向けて……………20

(丹波) 丹波篠山市立今田幼稚園
げんき なかよし 力いっぱい……………23

(神戸) 神戸市立御影中学校
あたたかいまちをつくる……………20

(阪神) 三田市立三田幼稚園
夢中になって遊び込む子……………21

(淡路) 洲本市立鳥飼小学校
「つながる授業」から「広がる、深まる授業」へ……………23



共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実 ～「双方向」をキーワードとして～

(著者プロフィール)

□所属学会 日本LD学会、日本教育心理学会、日本心理臨床学会、日本人間教育学会、
日本DCD学会

□専門分野 特別支援教育

□主要著書・論文 「特別支援教育総論 ～教員と教員になりたい人のための特別支援教育入門～」(株)ERP,2019)、「発達障害の可能性のある児童への読み書きのつまずきに対する多感覚活用の視点からの支援に関する一考察 ～触覚教材を用いて～」(人間教育第1巻第7号,2018)



おか の ゆ み こ
奈良学園大学 人間教育学部 准教授 岡野 由美子

特別支援教育が平成19年4月に法的に位置付けられてから、今年で15年目を迎えている。共生社会の実現に向けた、今後の特別支援教育の展開について、「双方向の視点」をキーワードとして考えたい。

1 はじめに

「『片翼の小さな飛行機』は、別に飛べんでもよかったんやないか」これは、NHK Eテレの「バリバラ」出演者、玉木幸則さんの言葉である^(注1)。

2021年8月、新型コロナウイルス感染症の拡大で世界が困難な状況にある中、東京パラリンピックが開催された。なかでも、「WE HAVE WINGS」をテーマに行われた開会式のストーリーは感動を呼んだ。ご覧になった方も多かっただろう。私ももちろん感動した一人であったが、後にこの玉木さんの言葉を読み、多様性についての大切な視点が示されていると感じた。どこかに「最後は飛べた、それが感動なのだ」という考え方はなかっただろうか。知らず知らずに、こうでなければならぬというような考え方は、まだまだあちこちにあるのではないか。また、小学校の教師であった頃の自分も、児童に「こうでなければならぬ」ということを押し付けてはいなかったか。それは、真の指導なのだろうか。

多様性とは、そのような押し付けや縛られた価値観からは広がりにくいと感じる。

私は、一方からの視点だけで物事を判断するのではなく、せめて2つの視点から物事を見ることを意識している。本来はもっと多様な視点で考えることができればよいのだろう。例えば、1つの目標(ゴール)を目指す時、「双方向」からのアプローチがあることでそこに近づけたり、妥当な解決策を見出せるということがある。「個」と「全体」、「ボトムアップ」と「トップダウン」などの視点も同様である。

子どもたちは、多様性を認める社会の第1歩を学校という小さな社会で経験することになる。多面的に物事を捉える、ということは共生社会の実現において大切な視点になりうると考えられるが、まずは教師自らが多面的な捉え方ができるように意識したい。

今回は、特別な支援を要する児童生徒の指導支援について、「双方向からの視点」で整理してみたい。

2 「個」を大切に、認め合える学級「集団」づくり

特別な支援を可能にする学級づくりでは、「個」への支援と「集団」へのアプローチの2つの視点が重要である^(注2)。

特別な支援の必要な児童生徒は、通常の学級の中に約6.5%存在しているという結果が出ている^(注3)。学級担任は支援の必要な児童への個別な関わりと、学級全体への指導を担っている。

(1) 個への「支援」

発達障害のある児童生徒は、学習や生活の中でつまずくことが多く、失敗体験を積み重ねてしまいがちである。支援をきめ細かにを行い、励ましたり促したりしながら支えていく。ただ、教師自身が、個別支援は自分がすべきという考えが強すぎはしないかということを振り返る必要はある。周囲の児童生徒は、教師がどのように関わるかを見ている。また、児童生徒が、自然な関わりとして適度に声をかけたり手伝ったりしていることもある。学級の構成員は教師と児童生徒であるが、その構図が教師対児童生徒だけになる必要はない。児童と児童の横のつながりが複雑な双方向の線を描いているものである。むしろ、児童生徒同士が学び合い、つながり合う、そのような学級集団をいかに構築できるかということが大切な視点であることを忘れてはならない。

(2) 集団への「支援」

個別の支援を必要とする児童生徒を巻き込んだ、学級集団を高める指導というものも、また大切な視点である。曾山ら^(注4)は、教育力のある親和的な集団づくりの具体方策として、①ルール、②リレーション、③友だちからの受容、④教師支援、という4つの観点を述べている。この取組の中で教師は、ルールについてクラスで考えたり、ペアで考え合う時間を設定したり、発達障害のある児童生徒に

プラスの言葉をかけられる友達を同じ班にしたりするなどの手立てをとり、学級集団づくりに取り組んでいる。教師は常に「集団」を視野に入れ、その中で児童生徒をつなぐしかけをつくり、さらに特別な支援を要する児童生徒を認め支える支援も大切にしている。

また、阿部^(注5)は、通常学級の中でADHD児が自己肯定感をもち、他の児童と学級生活を送ることができるためには、①ADHD児の障害特性に応じた個別的対応、②学級の児童間の良好な人間関係の形成や担任教師との信頼関係を形成する「学級づくり」、③全員の児童が理解しやすい教授学習の構築を目指した「わかる授業づくり」、④ADHD児を担当する教師をサポートする学校システム、という包括的支援が必要であると述べている。ここにも「学級づくり」「わかる授業」といった集団への取組の重要さが述べられている。

(3) 双方からの支援

このように見てくると、学級集団への働きかけは、個別の対応無しでは困難であり、その逆も同様である。つまり、個別と集団、双方への関わりの視点が必要である。意識的ではないかもしれないが、学級の落ち着きや個々の適応により、教師はどちらに重点を置くか、常に変えつつバランスを取り、指導支援を行っている。

また、個々の違いを認め合う仲間づくりをするには、まず教師がその個性をどれだけ認めているかということが、実は大きく影響していると私は考えている。「多様性を認め合う」と言いつつ、態度が伴っていなければどうか。集団の規律や規範意識は当然必要ではあるが、教師にその意識が強すぎると、守れない者に対し厳しすぎる指導になることがある。それを見ている児童生徒が同じようにきつくあたったり、児童生徒間に上下関係を作ってしまう可能性もある。これは「自分は正しいことを教えてあげている」「だから自分にはそうしていい権利がある」という思い

込みが相手にとって辛い状況を生み出すといういじめの構造にもつながる^(注6)。このような指導がどんなメッセージを発しているかということを考えてみてほしい。

逸脱行動に対しては、まず「なぜ守れないのか」その行動の要因を探る。手助けが必要なら支援し、できるようになればそのことを褒め、認める。すぐには行動変容が起きないかもしれないが、諦めずに児童生徒の力を信じて関わる。そういう教師の姿もまた、児童生徒は見ている。教師が発するメッセージは、言葉だけではない。姿そのものが児童生徒に何かを伝えている。「言葉」と「姿勢」双方が合致しているかどうか、時々振り返りたい。

3 「原因」と「評価」で支援する

教育相談や研修などの相談や質問では「何をしたらよいか。具体例が知りたい」という声が多い。グループワークをすると、アイデアや方法、普段の悩みなどの情報交換は大変に盛り上がる。担当の児童生徒の姿を思い描き、「これはよいかも」「こちらもやってみたい」と持ち帰っておられると感じる。これは、指導支援の最前線で日々を過ごしている先生方ならではの様子と受け止めている。ぜひ色々実践して、その後に、なぜその方法を選択したのかを説明できるか、自身で確認してみたい。その支援の先にどのような姿を期待するのか(目標)が抜け落ちていると、方法論に終始してしまう。

なぜ、すぐに席を立ってしまうのだろう。なぜ、大きな声を出すのだろう。なぜ、友達を叩いてしまうのだろう。日々児童生徒と接している先生方なら、いくつか原因を想定できると思う。想定のもと具体的な指導を行い、必ずその後の変化について、観察、評価をする。例えば、「他の教師の指導でも同じような結果になるのか」「児童生徒が、自分でできる術をいくつか習得でき、実際使えているか」などである。「自分ならうまくいく」「通級指導教室ではうまくいく」、これだけで評

価をするのではなく、特別支援教育の目標である「自立」や「社会参加」を見据えた評価を大切にしたい。「なぜこのような行動をするのだろうか？」が出発点である。その観察力や原因を探る力は、先生方の経験と少しの特別支援教育の視点から磨きがかかるのではないかと考える。「原因」と「評価」、それが次の指導支援につながる。

4 「ボトムアップ」と「トップダウン」のチェンジを図る

障害のある児童生徒の指導支援は、できないことばかりに注目していると、なかなか次のステップが見えてこない。原因が想定できたら、まずは目標を設定する。例えば、小学校3年生の児童が、3年生で習得すべき漢字の読み書き全てできることを目標とするのか、6割を目標とするのか。あまり良い例ではないが「うちの子はいつまでたっても、ひらがなの勉強しています」とか「勉強よりも、一人で生活できる力をつけてほしい」と思っていますが、先生に指導のことで保護者が口出しするのもはばかりで…」などの声をきくことがある。これは目標設定が適切でなかった例かもしれない。

低学年では、苦手な部分に着目した「ボトムアップ」的支援は大切であるが、どこかで指導のギアチェンジを図らねばならない。「トップダウン」的な支援で、得意を生かすことに指導の重点を置くことである。目標を達成できていないまま次のステップに進むことは抵抗があるかもしれない。しかし、定型発達の児童生徒も、教科学習の全てを理解して次の学年に進んでいるわけではない。小さな頃には読めなかった漢字も、その後の学習で何度も目にする中で覚えたり、新たな文字を習う中で次第に簡単なものが覚えられたりする。物を見たり触ったり話を聞いたり、様々な経験を通して身につけてくることもある。低学年ではより丁寧な「ボトムアップ」的な指導に重点を置き、中学、高校になれば、次

第に得意を生かす「トップダウン」的な指導へ視点を変化させていく。

また、児童生徒の生活年齢も念頭において指導支援にあたることも大切である。学校の中では当たり前のことが、外に出れば当たり前とは見えない場合がある。発達年齢と生活年齢を考えて指導にあたること。一人の人格として尊重しあえる関わりでありたいものである。

5 おわりに

大学入試センター試験における受験上の配慮がなされるようになったとき、これによって特別支援教育は急激に進むだろうと言われた。子どもの成長のベクトルは小学校から中学校・高等学校へと向かうが、その逆方向のベクトルが双方向からの支援体制の構築の波を作り出した。このように、双方向からのアプローチが、物事を大きく動かす近道となることがある。

学校現場では、特別支援教育のことをゆっくり調べたり勉強したりする時間が足りないくらい、日々の教育実践に追われているというのが先生方の思いではないかと推察する。そのような先生方に、少しでも読みやすく手に取りやすい物を、ということで兵庫県立特別支援教育センターでは、「特別支援教育ハ



▲ 特別支援教育ハンドブック



ンドブック」を2018年に発行し、各小・中学校に配布している。HPからダウンロードも可能である。指導支援に困った時、手にとってみて欲しい。

「障害のある児童生徒だから、発達障害だからこうしなければならない」という考えではなく、お互いに学び合い、教師も児童生徒もお互いをリスペクトしつつ関わる、そのような関係の構築こそが、真の共生社会の実現につながるのではないだろうか。

注

- 1 小瀬康太郎(2021)「飛べない生き方もある」バリバラ出演者、パラへの思い、朝日新聞デジタル、掲載URL <https://www.asahi.com/articles/ASP8X3JDZP8VULEI00P.html>
- 2 岩本佳世・野呂文行(2017)「通常学級における学級全体への支援と個別支援の組合せー発達障害・知的障害児童を含む学級全児童の学習準備行動への効果ー」、行動分析学研究、30(2)、pp.138-152
- 3 文部科学省(2012)「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
- 4 曾山和彦・堅田明義(2012)「発達障害児の在籍する通常学級における児童の学級適応に関する研究ールール、リレーション、友だちからの受容、教師支援の視点からー」、特殊教育研究、50(4)、pp.373-382
- 5 阿部芳久(2021)「通常学級におけるADHD児への包括的支援の探索」、東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究年報、第13号 pp.67-95
- 6 和久田学(2019)「学校を変えるいじめの科学」日本評論社





誰もが安心して生活できる
学校にするために



宍粟市立波賀小学校

いのこ
教諭 猪子 かおり

1 はじめに

本校は、宍粟市北部にあり、平成27年に、学校規模適正化のため、宍粟市立道谷小学校・野原小学校・波賀小学校の3校が統合し、新たに波賀小学校としてスタートした。現在、全校児童109名の小規模校である。自然豊かな地域で、日々感染症対策をしながらではあるが、子どもたちはのびのびと学校生活を満喫している。昨年度までは、特別支援学級が3クラス（知的・自閉情緒・弱視）あったが、今年度より、医療的ケア児（以下「医ケア児」）の入学により、肢体不自由学級が新設されることになった。本稿では、医ケア児の教育的支援に全教職員が「One team」として取り組んでいる様子を紹介する。

2 就学先決定まで

医ケア児の保護者にとって、学校に就学するということは、様々な困難が想定され、生活環境の変化や病気への大きな不安と向き合うことになる。難病を抱える本児の保護者は、当初就学はもちろん就園も考えておられず、病院の定期検診・児童発達支援サービス・訪問看護等を利用し、保護者が在宅で育てていくつもりであった。就学の3年前から、小学校や幼稚園、市教委や保健福祉課、近隣の特別支援学校が連携し、保護者へ就園就学についてのアプローチを行っていった。それぞれが少しずつ歩み寄り、信頼関係を築き保護者の気持ちが前に向き始めた。幼稚園への入園は叶わなかったが、地域の幼稚園OGの協力もあり、不定期ではあるが、本児の体調の良いときに、母親と共に幼稚園で読み聞かせ

の活動に参加できるようになった。幼稚園で周りの園児と触れ合う時間を持てるようになり、家庭以外での生活体験を積み上げ、小学校への就学を具体的に進めていった。候補としては、特別支援学校、以前から肢体不自由学級がある市内の小学校、そして校区の波賀小学校の3つがあがった。特別支援学校の見学では、同じように医療的ケアを必要とする児童と一緒に生活することを想定して、体育祭や文化祭などを見学された。また、市内の学校見学では、教室環境がすでに整っている状況の中、普通学校での生活はどういうものになるのかを考えながら見学された。様々な環境、交通手段（児童の送迎）などを検討された結果、保護者は最終的に校区の小学校である本校への入学を希望された。

3 入学までの準備

(1) 学校サイド

医ケア児の受け入れにあたり職員は、近隣の学校を訪問し、施設の見学や職員の心構えなどを教えてもらうところから始めた。特別支援学校の施設見学では、医ケア児が安心して登校し、学習できる環境にするには、何が必要なのかを聞いたり、実際に使用しているところを見学させてもらったりした。また、市内の学校では、教室環境の工夫や備品の購入に関して、どういう規格のものがあればよいか、必要最低限、何を揃えれば学級をスタートさせることができるのか、実際に担任している先生からの聞き取りを行った。また、本児が、就学前から様々な児童発達支援センターに通っていたので、それぞれの施設を見学したり、理学療法士の方と懇談して入学に

向けての準備を進めていった。さらに、校内委員会や職員研修を設け、医ケアについて指導主事から話を聞いて研修を深めたり、本児の出生当時から関わっておられる理学療法士さんからのアドバイスを受けて、「チーム〇〇くん」として全教職員で迎えようという雰囲気をつくった。

(2) 保護者サイド

就学前まで、同学年の子と触れ合う機会がほぼなかったのも、少しでも友だちと顔見知りになっておこうと、本児の幼稚園の読み聞かせのボランティアに参加され、その際、一緒に幼稚園に行き、友だちと触れ合う機会を持たれた。また、入学に向けて、学校職員（管理職、養護教諭）や市教委との面談を複数回行い、購入する備品の検討を行った。

そして、学校側が作成した個別の支援計画や指導計画、さらに主治医の意見書や指示書などの関係書類について保護者が確認を行った。

4 あおぞら学級スタート!

教室環境が整い、就学に向けての関係書類も整ったところで、私が本児の所属するあおぞら学級の担任になった。実は、人事異動で今年度から本校に転任となったので、私自身は今までの様々な準備には全く関わっていなかった。新学期の準備として、特別に3月末に受け入れのための事前打ち合わせを行い、職員や看護師と出会った。そこから慌ただしく、4月の入学式から学校生活をどう進めていくのか話し合いを重ね、アイデアを出し合った。

(1) はじめの一步

入学式にどういう形で参加するのがベストなのか考えた。昨年度より、コロナ禍での式のため、出席者は、新入生児童と保護者以外の出席者については、学校職員は人数制限し、来賓も少なくし、出来るだけ短時間で終わらせるようにしていたので、本児にとっても身体への負担は少なく済むだろうと思われた。ただ、何が起こるかは分からないので、必要に応じて本児が退場しやすいように座席

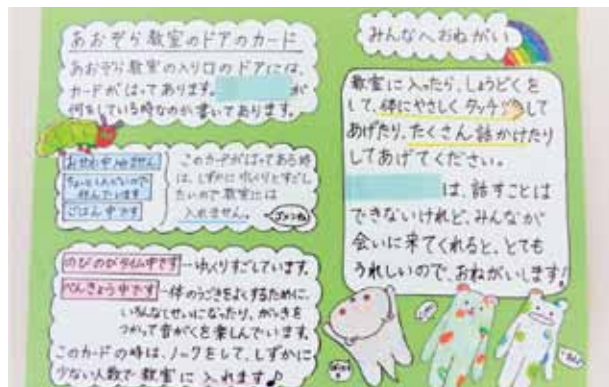
を入り口近くにするなどの配慮を行った。それらのことを職員で共通理解してから、入学式前日に来校してもらい、教室や体育館で座席の確認や動きのシミュレーションをして、保護者にとっても、本児にとっても安心して式が迎えられようにした。職員も保護者も緊張と不安の中での入学式であったが、最後まで安定した体調で式に出席することができた。



▲ 明るく楽しい雰囲気のあおぞら学級に

(2) 友だちとの出会い

「なんで、これ（バギー）に乗ってるん？」入学式後の交流学級に行ったときに、同級生から言われた言葉である。幼稚園からの友だちは、本児のことを知っているが、保育園からの友だちにとっては、初めての対面だったので、素直な反応であったと思う。その言葉を聞いて、早急に本児のことを話す必要があると考えた。そこで、本児の病気について、子どもたちが分かる範囲で伝え、みんなと同じ1年生であることや、できないことが多いが、みんなと一緒に過ごすことが本児にとって大切であることを伝えた。また、2年～6年の子どもたちにも話をする必要があると考え、看護師と相談し、病気に関する内容や支援学級での様子、本児にとって何が必要なのかを分かりやすくイラストを交えた紹介ボードを作成し、保護者に確認を取った後、話をした。



▲ 看護師作成の紹介ボード

(3) 交流学級との関わり

1日に1回は、交流学級に行き、同級生と触れ合う時間を持つと考えていたが、本児の体調のことや、特別支援学級での訓練の時間の確保などのこともあり、なかなか毎日同じように交流学級に行くことは難しいことが多かった。そこで、交流学級の担任からの提案で、その日の日番が「〇〇くん、あのね」というカードを作り、学校での出来事を書いたカードを届けに来てくれるようになった。



▲ あのねカードが届いたよ

(4) 他学年の子どもたちとの関わり

全学年に話をした後には、教室によく顔を

見せてくれるようになった子、かわいいイラストを描いて持って来てくれる子、折り紙で様々なものを作り、持って来てくれる子など、たくさんの友だちが一緒にできた。それらの作品を教室に掲示することで温かい雰囲気になったり、持って来てくれた児童も「ここに貼ってある!」と嬉しそうに眺め、また新たな作品をプレゼントしてくれたりするようになった。ただ、一度に多くの子どもたちが来室すると、感染症の心配や医療用具、訓練用具がたくさんあって危険なこともあるので、人数制限をしながらではあるが、声をかけたり、タッチしてもらったりした。

また、教室に来て、本児の体調や注入中などで入室できない時もあるので、教室の入り口にイラストの表示を出して、入室できる時や入室できない時を目で見て判断できるようにした。その際、「あっ、今は入れんわ」と残念そうに言う声が入り口の前で聞こえてきたので、「〇〇くん、きたよ」のボードを作り、「入室はできなかったが、会いに来たよ」と意思表示ができるよう画用紙にシールを貼ってもらい、多くの児童が来てくれたことが確認できるようにした。



▲ 教室入り口の表示

(5) 教職員の連携 (One teamとして)

昨年度から本校にいた教職員は、ある程度は本児の病状について知っていたが、今春の異動でメンバーが変わったこともあり、できる限り児童について教職員と話をする機会をもつよう心がけた。また、毎週金曜日の終礼では「今週の〇〇くん」として、その週の本児の様子を教職員に詳しく伝える時間を設け

てもらった。そして、できるだけ多くの先生に教室に来てもらい、訓練の様子を見てもらったり話しかけたり、触れ合ってもらったりすることが本児にとってよい刺激になることを伝えた。終礼の後には、色んな職員から「今度、読み聞かせする本を持って行くわ」とか「注入している時に見学しても大丈夫？」と言われることで、本児に関心を持ってもらえていることや、全教職員で関わりあっているという雰囲気が感じられるようになった。

(6) あおぞら学級での1日

○登校までに

看護師と一緒に教室の準備として、吸引器の設置、教室の温度管理、1日の予定の確認をする。

○登校

保護者の送迎後、看護師が本児を抱えて教室に入り、担任がモニターなどを受け取り設置し、授業の準備を行う。それから、バイタルチェックをし、その日の活動内容を看護師と相談して決める（前日にある程度は決めているが、当日の体調で内容が大きく変化するため）。

○授業（訓練・様々な刺激）

【朝のあいさつ】

校長先生や隣の教室の児童が来室し、朝のあいさつをしたり、その日の天気や行事などを知らせ、声をかけたりしてくれる。

【装具の使用】

腹臥位や立位台などを使い、体位変換を行うことで、呼吸の安定を図ることができたり、身体への刺激を与えたりする。

【ボールプール】

本児は、自分で身体を動かすことはできないので、視線が偏りがちになる。そこで、マットに寝かせた本児をボールプールのボールの上に乘せ、マットごと動かすと景色が変化し、視覚への刺激となる。また、背面から伝わるボールの感覚が心地よさを生み、リラックス効果もあると考え取り組んでいる。

【音楽・図工】

専科の先生に入ってもらい、音楽を流したり、手を持ってもらいながらではあるが、

楽器に触れさせて色々な音を聴かせる。また、図工では、絵の具を手に着けて画用紙に線を描いたり、点を付けて模様を描いたりする。

【その他】

本校には、たくさん楽しいアイデアを持った先生がいるので、それぞれの持ち味を生かした関わりを持ってもらっている。

読み聞かせが得意な先生には、声を変えながら上手に読み聞かせをしてもらったり、工作が得意な先生には、手作りのスヌーズレンを作成してもらったりしている。さらに、看護師も手先が器用なので、手作り絵本や明るく楽しい教室掲示を作ってもらったりしている。



▲ 様々な特技を持った先生たち

5 おわりに

本児を受け入れるにあたり、保護者はもちろんのこと、学校としても多くの不安があり、小学校での生活をどう支援していくことがいいのか迷いながらのスタートであった。しかし、本校全教職員の温かい思いや市教委からの支援、さらには、本児に幼少期から関わってくださっている支援センターの方、保健師、訪問看護師などの専門分野の方からのアドバイスを受けながら、看護師とともに日々本児と向き合っている。

私たちの取組は、まだ始まったばかりである。これからは、あおぞら学級をさらに充実発展させながら、本児が、波賀っ子たちや私たち教職員と共によりよく成長していけるよう研修を積み重ねていきたい。



ユニバーサルな学校づくり ～小・中学校の連携を通して～



丹波篠山市立篠山中学校
さいとう ゆみ え
教諭 齋藤 弓絵

1 はじめに

本校は、生徒数368名、学級数14（うち特別支援学級4）の中学校である。また、学校生活支援教員が配置され、通級による指導の拠点校でもある。

▼ 本校在籍生徒数（2021年4月）

	通常の学級			特別 学級 支援	計
	SFなし	SFあり			
	－	－	通級		
1 年	107	9	6	3	125
2 年	99	2	8	10	119
3 年	104	9	7	4	124
計	310	20	21	17	368

※ SF：サポートファイル

令和3年度は、丹波篠山市教育委員会教育研究所が推進する「ユニバーサルな学校づくり ～小・中学校連携を通して～」に基づいて研究に取り組んでいる。

本研究を進める意義は、以下の通りである。

(1) 小学校からの連続性

「中1ギャップ」という言葉がある。小学校と中学校の制度の違いが種々の問題の主原因であるといったイメージや、中学1年生になった段階で突然何かが起きるかのようなイメージを抱くと、問題の本質や所在を見誤り、間違った対応をしかねない。小学校からの連

続性に注目し、問題の把握と解消に取り組むことが重要である。

また、いじめや不登校が増加する背景や要因として、中学校区が抱える課題を多面的に捉えるとともに、小学校からの連続性を確保した教育活動の充実を図る必要がある。

(2) 二次障害の防止

特別な支援を必要としている児童生徒が、理解不足による過度な叱責やいじめなど、否定的な周囲の対応を経験し、そのことが自信喪失、自尊心の低下、自己イメージの貧困化を招いていることがある。二次障害として、外在化障害（極端な反抗、暴力、家出、反社会的犯罪行為等）と内在化障害（不安、気分の落ち込み、対人恐怖、引きこもり等）などが挙げられる。これまで「中1ギャップ」とひとくくりにされてきた問題の要因として、二次障害が関連している可能性が考えられる。

ユニバーサルな学校づくりの取組を見直し、適切な教育的支援を行うことが、二次障害を軽減するという観点からも重要である。

(3) 継続的でスムーズな支援の実現

ユニバーサルな学校づくりは、小学校または中学校のいずれかが単独で行うのではなく、中学校区ぐるみで進める必要がある。小学校単独の取組では支援が途切れることになり、中学校単独の取組では支援を受け入れる土壌づくりに時間がかかるからである。

2 ユニバーサルな学校づくり

「ユニバーサルな学校」を推進する柱は、次の4つである。

- (1) 人的環境のユニバーサルデザイン化
- (2) 授業のユニバーサルデザイン化
- (3) 教室環境のユニバーサルデザイン化
- (4) 小・中学校連携による組織的取組

(1) 人的環境のユニバーサルデザイン化

① 心の居場所（学級づくり）

学校生活における「心の居場所」の中心は学級である。共感的な対話、寄り添う姿勢とともに、子どもたちが安心して過ごすための規律正しさと自由な雰囲気を大切に「ぶれない指導」等で、「心の居場所」としての学級づくりをすすめている。

② 友だちとの関係

安心・安全な学級づくりが進むと、生徒同士が信頼関係を深めていく。

例えば、係活動や行事等を通して友だちとの連帯感が生まれ、役割を担うことで自己有用感が高まる。

昨今は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、行事等が中止や延期になることが続いている。今まで以上に健康面での配慮は必要であるが、集団活動の機会を作ることも大切である。

③ 具体例「1年ミニ運動会」

1学期末、1年がミニ運動会を実施した。生徒が企画し、運営をすることで、達成感や充実感が味わえるものであった。

また、運動には「ルール」が存在する。「ルール」を明確に伝えること、お互いに「ルール」を守ること、ポジティブな声かけをすることなど、誰もが楽しめる言動を心がける経験の1つにもなった。



▲ ミニ運動会

(2) 授業のユニバーサルデザイン化

① 視覚化、焦点化、共有化

授業のユニバーサルデザイン化においては、「視覚化、焦点化、共有化」の3つを確認した。今年度は特に、授業に「見通し」をもたせるため、生徒にとってわかりやすい目標と学習の流れを提示することを全ての授業で行っている。

② 具体例「校内研修」

1学期末の校内研修で、実践例を紹介してもらった機会を作った。

特に、「視覚化」について、見やすい文字の色、サイズ、フォント、そして口頭指示だけの時と視覚情報があった時の生徒の反応の違いなどの説明を全体で確認することができた。



▲ 視覚化の一例

教科ごとの特性があり、中学校での授業研究は各教科で行われることが多い。しかし、教科の枠を超えて情報交流をすることが、授業のユニバーサルデザイン化の一助になると思われる。

(3) 教室環境のユニバーサルデザイン化

① 学級全体が落ち着く効果

情報を「整理整頓」し、「わかりやすい」教室環境にする。学級全体が落ち着くことで、生徒個々もすべきことに集中しやすくなる。具体的な取組は、次のとおりである。

- ・「見通し」(予定)を示す
- ・掲示物をカテゴリー化して貼る
- ・教師の言語量を調整する 等

その他、座席配置にも配慮している。

② 具体例「朝のスライドショー」

対人関係やコミュニケーションが苦手な生徒への教室環境づくりの例である。

ある教室では、朝の会が始まるまで、テレビ画面にスライドショー(連絡事項、時事ニュース、クイズ等)を流し続けている。画面を見ながらクイズの答えを考えて過ごすことができたり、会話のきっかけを見つれたりすることができている。

また、予定の確認ができたり、時事ニュー



▲ 教室環境づくり

スに関心を持てたりと、提示された情報はそれぞれに役立っている。

(4) 小・中学校連携による組織的取組

① 推進体制

篠山中学校と校区5つの小学校で部会が組織されている。

例年は、それぞれの部会ごとのテーマで活動をしている。本年度は、部会ごとに各校の代表者が集まってユニバーサルデザイン化の取組についての情報交換を行った。

▼ 小中連携 各部会の構成人数

	生徒指導	学力向上	道徳教育	健康安全	特別支援教育
中学校	7	6	4	6	6
A小学校	2	2	2	3	2
B小学校	2	3	3	2	2
C小学校	2	2	2	2	3
D小学校	2	4	2	2	2
E小学校	2	2	2	2	2
計	17	19	15	17	17

小学校の取組は、次のとおりである。

- ・構造化をしている
- ・学習の流れを提示している
- ・「肯定文」で伝えるようにしている
- ・チームで取り組んでいる 等

内容は、中学校と共通しているものが多かった。有意義ではあったが、断片的で表面的な情報交流に留まっている面もあった。

事例を通して、より具体的にお互いの指導支援について話し合える機会が必要ではないかと考えている。

② 具体例「支援内容の引継ぎ」

入学して早々、机にダラ～ンと突っ伏し

ている生徒がいた。支援を必要としている生徒ではあるものの、学習態度についての指導も必要である。どこまでを指導すればよいのか、迷いが生じる事例であった。

小学校からは、低学年の時から離席が多く、教師の発言に対し衝動的な反応が多かったという情報を引き継いでいた。また、この姿勢であれば自席で過ごすことができるようになったという指導の経緯があることもわかった。

この情報があったことで、「姿勢を正しなさい」という叱責より、「今は大事な話だから、顔を上げて聞きましょう」といった声かけが望ましいと判断できた。

③ 具体例「小中移行期のケース会議」

体育の持久走の学習で、授業の時間になると廊下で止まってしまう生徒がいた。

持久走が理由であることは明らかであったが、自分で言葉にできず困っていた。「持久走が嫌」とだけ聞けば、「しんどいから逃げている」とイメージしてしまいがちである。しかし、小学校卒業前のケース会議に中学校担当者も参加していたことで、「中学校入学後、精一杯頑張っていて、持久走だけは限界を超えている」と捉えることができた。

教科担任と相談をし、持久走では、周回カードを提示する役割として参加することができた。

④ 継続的で一貫性のある支援

中学校教員も研鑽を積んでいるため、入学以降のようすで、目の前の状態の見立てはある程度できる。しかし、小学校当時の本人のつらさ、努力、成長過程まで想像することは難しい。上記2つの事例のように、小学校と連携ができていなければ、生徒の状態像を見誤り、教師が叱責を繰り返していたかもしれない。理解不足による過度な叱責が続けば、二次的な問題を生じさせていた可能性もある。

今後も小学校と連携することで、生徒の言動の背景を理解した上で指導支援し、生徒の成長につなげたい。

3 おわりに

「学校を卒業したら、この支援はしてもらえないのでは」「社会に出た後、この特性を理解してもらえるだろうか」といった心配の声を聞くことがある。特別支援教育は、特別な支援を必要とする子どもたちの成長を支えるとともに、社会全体への働きかけを進めていくことが重要である。

また、わたしたちは「共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実」をめざしている。共生社会は、すべての人が幸せに生きる社会である。目の前にいる子どもたちは、その社会を担う子どもたちである。

「ユニバーサルな学校づくり」が、将来、子どもたち自身が作る「共生社会」へとつながっていくことを願い、地道な取組を重ねていきたい。

【参考文献】

阿部利彦

「通常学級のユニバーサルデザイン スタートダッシュQ & A55」、東洋館出版社、2017年
丹波篠山市教育委員会教育研究所

「ユニバーサルな学校づくり ～小・中学校連携を通して～」、2021年3月





共生社会の実現に向けた 特別支援教育の充実に向けて ～高等学校から特別支援学校へ、 健常者から障害者へ～



県立和田山特別支援学校

た ぶ ち し ん じ
教諭 田 淵 伸 司

1 はじめに

臨時講師として6年間、教諭として10年間、県立の高等学校で数学を教えてきた。そんな私が、特別支援学校教諭免許状を取得し、特別支援学校に転勤を決意したのは理由がある。それは、私が障害者になったからである。

26歳の時、夏にスノーボードのジャンプトレーニング中、事故で両大腿骨を骨折。手術は成功したが、右足に脛腓骨神経麻痺の障害を持つこととなった。怪我がきっかけで、今まで関わりが無かった「医療」「福祉」、そして「障害」について知ることとなった。あわせて、私はもう健常者ではなく、障害者として生きていくことになった。そんな私が、障害を持った教育者として、障害のある子どもたちの成長に関わることが、大きな意味を持っているのではないのかと感じ、40歳を目前に転勤を希望した。

現在、特別支援学校に勤務し2年目である。まだ、学校全体を把握できておらず、肢体不自由を有する生徒（知的障害有）を主に受け持っているが、高等学校から特別支援学校にきた教員としての考えや思い、障害のある生徒との関わりや授業の工夫、私にできることについて執筆する。

2 学校としての取組

本校は、「天空の城 竹田城」の近くであり、知的障害や肢体不自由の児童・生徒たちのための小学部・中学部・高等部を設置している。肢体不自由児童・生徒は全県から来て

おり、寄宿舎で生活している。現在、小学部は14名、中学部は13名、高等部は24名の計51名の児童・生徒が在籍している。

近隣の小・中学校に対して、教育相談を実施して、特別支援学級の担任の先生やその保護者に対して、早い段階から特別な支援を必要とする児童・生徒への対応や、支援の方法など相談できる取組を行っている。

コロナ禍により、本校でも様々な対策を余儀なくされた。早くに本校独自のYouTubeチャンネルを開設し、校内のガイドラインを早急に整備した。但馬地域は他の地域より感染者が少ないとはいえ、県内全域の生徒が在籍している。このように徹底した感染予防を実施したこともあり、在籍生徒・保護者・職員に感染者は出ていない。交流事業においても、県立八鹿高等学校の生徒たちとのクリスマスイベントをオンラインで行うなどの工夫をして実施した。

就労実績では、朝来市役所や各地域事業所など、特に生徒の住む地域での就労を希望する家庭がほとんどだが、各地域の事業所やハローワーク、他の特別支援学校の進路指導部と連携して、就労を希望する生徒の進路実現を達成している。

3 高等学校から特別支援学校へ

同じ県立学校でも事情が異なることは明らかだったので、転勤初年度は初任者の気持ちで臨んだ。高等学校では40人に対して1人の担任であったが、特別支援学校では概ね2人の生徒に対して1人の教員が担当している。

授業においては、高等学校では、教科会で相談し学年ごとで進度を揃えるが、指導方法は教員個人に任されるのに対して、特別支援学校では、1クラスの授業に対して毎時間の指導略案を作成する。そこから生徒の実態に合わせて、主担当以外の先生がバックアップをする授業スタイルとなっている。高等学校では、教科指導力を向上させていくことが必要だが、特別支援学校では授業の順応性や教員間の協調性がより必要とされる。

また授業準備においては、高等学校では授業の空き時間に準備することができる。さらに、何年間も授業をしていると、過去のを再利用することができる。それに対して、特別支援学校は授業以外でも生徒と一日中一緒に生活するので、生徒が学校にいる間はほぼ準備ができない。ただ、部活動がほとんどないので、下校後は会議や研修の日を除いて準備することができる。しかし、過去のプリントなどの再利用は、生徒の実態に応じて授業のスタイルを変える必要があるので、あまり使うことができない。

特別支援学校にしかない授業形態もある。それが「各教科等を合わせた指導」で、「日常生活の指導」や「生活単元学習」などがある。社会・理科・情報などを合わせて授業することができるので、日常生活に合った授業を展開しやすい。また個々で行う「自立活動」も生徒の実態に合わせることができるので、授業を行いやすい。「作業」の授業では、就職に役立つ検定の練習や販売学習に向けての授業ができる。今年度から「兵庫県特別支援学校技能検定（パソコン部門）」を各校でプレ検定として実施するので、楽しみである。

だが、私にはまだまだ学ぶべきことがある。道徳の授業やキャリア教育、インクルーシブ教育などである。また、高等部以外の中学部や小学部についても学ぶ必要がある。学ぶことが多いのは進化するきっかけとなるので、うれしい。ただ、校内研修が多いため授業準備の時間が削られる。準備時間が高等学校と同等かそれ以上に必要だが、高等学校と違って授業の空き時間が無いため、下校後しか準

備する時間がとれず、時間の確保がとても重要で難しいと感じている。

4 知的障害がある生徒との関わり

(1) ICTの使用法について

ICTは、知的障害や肢体不自由を有する児童・生徒にとっては非常に便利なツールである。検索したいことを声だけで検索をすることができ、知識が無くてもインターネットで調べることが可能で、文字でコミュニケーションをとることができる。合理的配慮の面でも非常に役に立つこともあり、私も積極的に活用している。

一方、LINEのやりとり（特にグループLINE）やオンラインゲームでのやりとりで、感情が抑えられず、けんかになることが非常に多い。また、インターネットの危険性に疎いため、情報モラルの授業が非常に大切で、まずは家庭における使用状況を把握するため、いじめアンケートと併せて確認した。その結果について生活単元学習で説明したり、必要に応じて別の時間に個別に話をしたりした。その際に、すでに起きていた問題について話してくれたり、情報モラルの授業後に本人から申し出てくれたりして発覚した事例も複数あった。場合によっては、複数の生徒を対象に同時に指導するというのも大事で、個々に話すよりも互いの気持ちや考えがわかる。実際には、情報モラル教育教材「SNSノートおおさか」を参考にして、以下の項目を生徒に示し「友達にされて嫌だなと感じる順に番号をつけてみよう」との質問に対し、生徒から次のような回答があった。

- ・すぐに返信が来ない
- ・なかなか会話が終わらない
- ・知らないところで自分の話題が出ている
- ・話をしているのに、スマホを触っている
- ・自分が写っている写真を公開される

そして、自分の考えをまとめてから、みんな意見を出し合った。そこで、自分が嫌だと思っていることと、相手が嫌だと思っていることの違いを知ること、この後起きるト

ラブルを予測させた。LINEでは、本当にやり取りしているようなものをパワーポイントで作成して「このような言葉が来たら、みんなはどう思う？」などを繰り返し問うことで、何が問題なのかを考えさせた。そして、「それを踏まえてLINEを使いましょう」と促した。禁止にすれば、隠れてする可能性もあるが、なによりLINEは特に便利なツールなので、正しく使えるように指導することが大切である。また、抽象的な「SNSでは、…」といった説明より、生徒たちが実際に使っているアプリで説明することも大切である。

今回は、「LINE（主にグループ）」と「Nintendo Switch」のオンラインゲームでトラブルになっていたため、これを教材にして授業を行った。



▲ LINEによる手作り教材

(2) 教科としての指導

私の専門教科は数学なので、主に数学の授業を担当している。

知的障害のない肢体不自由の生徒には、高等学校で教えてきた内容で授業ができる。考える力や意欲は高等学校の生徒と同じなので、今まで培った「教えるプロ」としての力を発揮することができる。

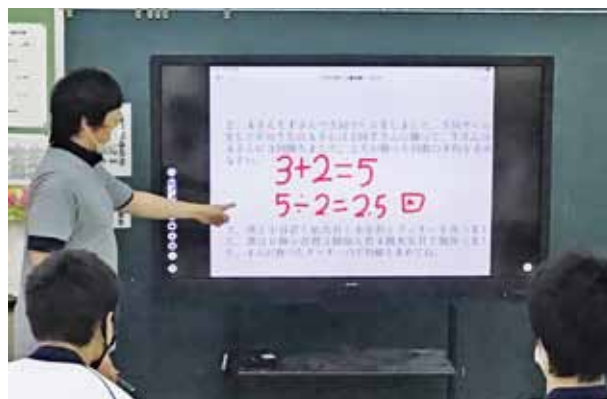
知的障害のあるクラスの授業では教材の工夫がかなり必要である。具体的な問題も必要だが、具体的すぎると逆に止まってしまうこともある。視覚的にも工夫が必要である。「生徒4人が漢字の小テストをした。Aさんは8点、Bさんは6点、Cさんは10点、Dさんは3点だった。4人の平均点を求めなさい」という問題に対しては、 $4+8+6+10+3+4$ と計算

してしまう。問題を読まずに数字だけを追いかけていると思われる。こだわりが強く、漢字が読めない生徒や、「Aさんって誰？」など話がずれる事がある。また、反復学習をしないと定着しないという課題もある。

生徒たちがスマホやタブレットの扱いに慣れていることから、ICTを活用しようと考え、生徒自らが問題を作成して、その問題をみんなで解くことにした。最初は「兵庫県から鹿児島県までは、5～6時間で行けますが、2つの平均値を求めてください」や「田渕先生は、朝の体温は36.1℃、昼の体温は36.9℃。ただし夜だけは38.9℃です」など、数学（算数）の問題としては成立しないものが多かった。そこで、電子黒板を使って、これらの問題について「どう直せば、問題として成立するか。問題を修正して、解いてみよう」と問いかけると、生徒たちは積極的に発表してくれた。教員が準備した問題より、みんなが持ち寄った問題を、自分たちで直し、解いて、答え合わせをしていく過程が楽しいようだ。

この授業を何度も繰り返した結果、「Aさんは昨日バナナの皮を踏んで2回転びました。今日もバナナの皮を踏んで昨日より2回多く転びました。Aさんが転んだ回数の平均を求めなさい」などセンスを感じる問題を作成した。ただ、すべての問題の漢字にルビを振ったり、問題そのものの説明をしたりと授業準備に相当な時間が必要である。

そして、先にも述べたが、生徒の実態が違えば、このやり方も毎年使えるわけではない。これは、あくまでも今年のみの実践ということになる。



▲ ICTを活用した数学の授業の様子



▲ 電子黒板に自分たちで作った問題を映し、解いている様子

5 障害者スポーツ

最初に述べたとおり、私は障害を持った教育者だ。と同時に、障害を持ったアスリートでもある。今はパラスノーボード日本代表に選ばれて活動しており、世界選手権やワールドカップで結果を残し、北京パラリンピックに向けて活動している。先生方・生徒のみなからの応援もあり、昨年度は、生徒からの立案で私に内緒で、大会前の壮行会を開いてくれた。



▲ 生徒が立案し、壮行会を実施している様子

高等学校勤務時の部活動では、陸上競技部の顧問を担当していたので、スポーツに関しても話す機会があったが、特別支援学校では、スポーツという部分で触れ合う機会が少

ない。それでもパラスポーツは増えており、本校では体育の授業に取り入れている。ボッチャでは担当している生徒が、兵庫県で優勝するなど素晴らしい結果を残している。

健常者であったときは、パラスポーツについて興味が無かったのが本音だ。だが、障害者となってからパラスポーツを見ると、とても素晴らしいと感じている。陸上競技を例にあげると、ただ走るだけだが、走れなくなった私からするとそれだけでも素晴らしい。走り幅跳びも高跳びも足にハンデがあるのに「どれだけ跳ぶんだ!」と感動できる。健常者にすればそこまですごい記録ではないかもしれないが、障害者から見ればとても感動できる。

障害を持ってみて、生徒も「できないからやらない」ではなく、「まずはやらせてほしい」と思っていることがわかった。本校の体育の先生方は積極的にパラスポーツに触れる機会を作っている。私も体育の先生方のように生徒とともにパラスポーツに触れる機会を増やしたいと思う。そして機会があれば、私が実践しているスノーボードも体験させたい。

6 おわりに

今の私があるのは、周りの人の助けがあったからである。この感情や経験を特別支援学校の生徒にも感じさせ、次に助けてあげるのは自分だという意識を持って生活してほしいと願っている。そのためにも、今の私にできることを理解し、将来生徒たちがどのように生きていくのかの選択肢を増やすことができるように教育活動をしていきたいと強く思っている。

健常者が多い中で、健常者の過ごしやすい社会の中で、障害者も同じように生き、共生している。どちらか一方が生きにくい社会であるのならば、それは間違っている。私は、健常者だったものとして、障害者になったものとして、教育者として、アスリートとして、自己研鑽を怠らずこれからも進化していきたい。それが、いずれは自分のために、家族のために、そして社会のために、子どもたちのためになると信じている。

自己有用感の育成に向けて^{ありま}ー県立有馬高等学校(定時制課程)ー ～ボランティア活動を通して～

「とてもいい経験でした。次もまた参加したいです」、ボランティア活動を終えた生徒の言葉です。本校は、入学以前にいじめや不登校を経験した生徒が半数以上を占めており、自己肯定感や自己有用感が低い傾向にあるのが現状です。それらをいかにして向上させるかが大きな課題であり、そのための一つの策として力を入れているのがボランティア活動です。清掃活動やこども食堂、サンタクロースボランティアなどの地域に密着した活動から、神戸マラソンの補助や東日本大震災復興ボランティアなど、地元を飛び出した活動まで多岐にわたっています。特徴的なのは、一度活動に参加した生徒が、その後、継続的に関わっていることです。自分が必要とされていると思い、やりがいを感じているようです。生徒たちは、ボランティア活動を通して地域社会に貢献することで、自分自身も成長しています。

コロナの影響でボランティア活動が縮小される中、一人でも多くの生徒がボランティア活動から自分の可能性を広げてもらいたいと願い、今後も力を入れて取り組んでいきます。

(県立有馬高等学校 定時制課程 教頭 高橋 剛)



▲ 東日本大震災の現地で、被災した方からのお話を聴く生徒たち

県立

トピックス

神戸

あたたかいまちをつくる

～受け継がれるシトラスリボンプロジェクト～

^{みかげ}
ー神戸市立御影中学校ー

「ただいま」「おかえり」と言い合えるまちをめざし、愛媛県で始まったシトラスリボンプロジェクト^{*}。昨年度、この活動に感銘を受けた74回生(現3年生)の評議委員会が中心となり、本校でのプロジェクトがスタートしました。地域と家庭と職場(学校)を表現した三つの輪のリボンを生徒が思いを込めて作り、それを身に付けて、コロナに負けないあたたかいまちを一緒につくろうとアピールをしました。その後、阪神御影駅にリボンを置いて頂くことになり、駅長の方から「とても好評で、置いてもうすぐなくなってしまうんですよ」という、嬉しい報告もありました。

今年度、3年生から1年生に向けて、この活動の趣旨と作り方の説明があり、総合的な学習の時間で作製しました。初めてのことで戸惑いながらも心を込めて作られたシトラスリボンと手書きのメッセージは、再び阪神御影駅に置かれ、地域の方々に生徒たちの思いを伝えています。

様々な行事や部活動が制限され、先輩から後輩へ大切な心を伝える場が少なくなっている中、この活動は全校生徒の心を結んでくれています。

(神戸市立御影中学校 校長 中根 晴美)



▲ シトラスリボンを作製する1年生と
学年カラーの赤で作られたシトラスリボン(右下)

夢中になって遊び込む子

さんだ
－三田市立三田幼稚園－

～「やってみたい遊び」を繰り返す中で育ち合う子どもたち（異年齢の関わりから）～

本園では、「夢中になって遊び込む子」をめざして取組を進めています。

ある日の園庭で、藤棚にぶら下がっている藤豆を何とかして採ろうとジャンプしたり、棒でつついたりしていた子どもたち。5歳児数人が、踏み台や積み木を持って来てそこに登って採っている様子をじーっと見ていた4歳A児。踏み台が空くと、自分もやってみようと登り、手を伸ばして採ろうとしますが全く届きません。5歳B児が「採ってあげようか。はい」と台に登って藤豆を採りA児に渡しました。それでも、まだじーっとぶら下がっている藤豆を見ているA児。B児は「自分で採りたいの？ちょっと待ってて」と、A児が届くようにともう一つ積み木を踏み台の上に乗せ、「押さえてあげるから登り」と言って、A児がゆっくりと積み木に登り、自分で採るのを手助けしてやりました。A児は、自分の気持ちに寄り添って関わってくれた5歳児の思いやりを感じ、憧れの気持ちを抱いたことでしょう。

この経験がA児の心に刻まれ、来年5歳児として、同じように優しく年下の子に接する姿となって現れることを願っています。

（三田市立三田幼稚園 園長 廣瀬 みちか）



▲ 藤豆に届くかな、採れますように！

阪 神

トピックス

播磨東

命を育む活動

おおべ
－小野市立大部小学校－

～40年の歴史を受け継ぐ一人一鉢の取組～

本校では、一年を通して児童一人ひとりが一鉢の花を育てています。この取組は、ほぼ40年にわたる取組となっています。6月と11月に小野市地域振興部まちづくり課から頂いた苗を植え替えます。植え替えの作業は1年生と6年生、2年生と4年生、3年生と5年生がペアになって行います。ポットから苗を外す方法や植木鉢への植え方を、経験を重ねてきた上級生が下級生の手を取り丁寧に教え伝えていきます。その光景は大変ほほえましいものです。作業を終えた児童は「お兄さんに優しく教えてもらって嬉しかった。大きく育つといいな」と笑顔で水かけをしていました。植え替えた鉢は、校舎の玄関先の花台に並べられます。全校生340人分、3種類の花が並びます。色も鮮やかで日々心を和ませてくれます。朝登校してくると、真っ先に一鉢に水をかける児童の姿が見られます。「おはよう」と声をかけながら、また、「土の乾き具合を確かめてからかけてあげてね」と子どもたちに伝えています。

今年度は、朝会で一人一鉢の歴史について子どもたちに語りました。長年受け継がれてきた「一鉢の命を育む取組」を通して、自分が世話をする花についての由来や特性を知り、花や葉の状態を見て花と対話をしながら育ててほしいと願っています。そしてこれからも、この取組により探究心と心豊かな感性、やさしい心、命を大切に作る心を育てていきます。

（小野市立大部小学校 校長 藤原 壽美）



▲ 登校後、自分の鉢花へ水をやる様子

「学びの種」を捉える

～「遊び たのシート」の作成から～

幼児教育の中核に、遊びがあります。遊びには、子どもたちの学びの種が詰まっています。教師は、子どもの「楽しい!」「もっとやってみたい!」「次はどうなる?」などの気付きや発見や感動を捉え、さらに没頭できるような環境づくりや援助を考えていきます。昨年度からドキュメンテーション「遊び たのシート」を作成し、遊びや学びの種の可視化に取り組んでいます。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と関連付けていくことで、どのような学びを得ようとしているのか、どのような非認知能力が身に付こうとしているのかなど、教師の捉えも整理しやすくなりました。

「遊び たのシート」は、掲示板に張って保護者のみなさんにも見ていただいています。「こんなふうに進んでいくやね」「やっぱり遊びって、大事なんやね」と、遊びへの理解とともに、子どもたちが育くんでいる力を感じてくださっているようです。これからも「遊び たのシート」を活用し、本園の幼児教育の質の向上をめざしていきます。

(姫路市立高浜幼稚園 園長 生友 温美)

たかはま
－姫路市立高浜幼稚園－



▲ 遊び たのシート!

播磨西

トピックス

但馬

支え合い、認め合う学校づくり

～共生社会の実現に向けて～

豊かな自然に抱かれた本校は、地域の木材を使用した木造建築として6年前にリニューアルされた木の香り漂う学校です。

本校では、障害の有無にかかわらず、共に学ぶという視点で、互いに支え、認め合う学校づくりを行っています。「ほかほかタイム」は、特別支援学級在籍の友だちの得意なことや苦手なことなどを全校生で共有する時間です。一人一人を知ること、運動会などの行事や委員会活動など日常生活で、お互いに支え合い、認め合って学校生活を送っています。また、校外での児童のお買い物体験など、地域の方々の協力を得て交流をしています。さらに、町内の特別支援学級や特別支援学校の子どもたちが、様々な体験活動で交流する合同学習も、楽しい取組になっています。

今後多くの人々との関りの中で、互いに人格と個性を尊重し合い、理解し合いながら生きていく共生社会の実現に向けた特別支援教育を推進していきます。

(香美町立村岡小学校 教頭 安田 雅司)

むらおか
－香美町立村岡小学校－



▲「ほかほかタイム」で知ったよ

げんき なかよし 力いっぱい - 丹波篠山市立^{こんだ}今田幼稚園 -

本園は丹波篠山市の西部に位置し、地区内には日本六古窯の1つ丹波焼の郷がある自然豊かな地域にあります。園庭にある花や実をつぶしての色水作り、その色水をジュースに見立ててのお店屋さんごっこ、見つけたカマキリやカナヘビをかごに入れてお世話をしたり、どんぐり集めに近くの広場までの散歩に行ったりして、豊かな自然環境を生かした保育を進めています。

この秋、園庭の裏にあるヤマザクラを使って「世界に一つだけのわたしのTシャツ」作りにチャレンジしました。まず、ビー玉やペットボトルキャップと輪ゴムで模様をつけたあと、職員が前日に作成した染色液が登場すると子どもたちは大興奮！大きなたらいにTシャツを入れ、何度も押し込んでいきました。見る見るうちに色が変わっていく様子に「魔法みたい！」の声。赤みがかった茶色の素敵なTシャツとなりました。運動会では、みんなおそろいのTシャツを着てダンスを披露しました。

今田っ子の合言葉は「げんき なかよし 力いっぱい」。子どもたちが心豊かに成長していけるように、これからも取り組んでいきます。



(丹波篠山市立今田幼稚園 園長 堀 香織) ▲ 私のTシャツ どんな色に染まるかな？

丹 波

トピックス

淡 路

「つながる授業」から「広がる、深まる授業」へ - 洲本市立^{とりかい}鳥飼小学校 - ～ ICTを活用した遠隔交流授業～

GIGAスクール構想により、昨年度から本市でも1人1台タブレット端末と通信ネットワーク環境が整備されました。本校においても「令和の日本型学校教育」の構築をめざして、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた取組をスタートさせました。

今回は、4年生の社会科「わたしたちの県」で、兵庫県についての調べ学習の一環として、尼崎市の小学校とWeb上で「つながる授業」を展開しました。グループごとに自分たちの住む町を紹介し合い、もっとくわしく聞いてみたいことや不思議に思ったことを質問し合いました。議論は熱を帯び、お互いの地域の特徴を深く理解することができました。授業後、子どもたちは、「鳥飼にも、ええところあるなあ」と自分たちの地域の良さを再発見し、「ふるさと鳥飼、ふるさと淡路島」を誇りに思うきっかけにもなりました。

これからもICT機器を文房具の一つとして活用しながら、今後は「つながる授業」から「広がる、深まる授業」への展開をめざしていきます。



(洲本市立鳥飼小学校 教頭 北畑 義将) ▲ わたしたちの住む町はこんなところですよ



児童が主体的に学ぶ外国語・外国語活動の授業づくり (2)

5領域の指導 ～ 話すこと (やり取り) ～

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授 **吉田 達弘**



本号では、外国語科・外国語活動の授業では、最も多くおこなわれる「話すこと (やり取り)」の言語活動について考えます。

■コミュニケーションのモード

英語教育では、聞く、読む、話す、書くの4技能で言語活動をとらえてきましたが、新学習指導要領では、話すことが「やり取り」と「発表」に分かれ、4技能5領域となりました。目の前の相手と会話をするやり取りでは、話し手－聞き手が発話毎に入れ替わりますが、発表では、聞き手 (聴衆) に向けて話す活動になります。

海外の外国語教育のカリキュラムやスタンダードをみると、コミュニケーション活動を4技能で分けずに、誰とどのような場面や目的で言語を使っているかで区分しているものが見られます。

例えば、アメリカ外国語教育学会 (以下「ACTFL」) の外国語学習スタンダードに示されているコミュニケーション活動は、「対人モード (interpersonal mode)」、「発表モード (presentational mode)」、「理解・鑑賞モード (interpretive mode)」の3つのモードに分けられており、それぞれのモードの下に、例えば、「対人モード」であれば、目の前の相手との会話 [= 「話すこと (やり取り)」] と同時に、メールやチャットなど、書くことを通じたやり取りが含まれます。いずれも、話し手 (発信者)－聞き手 (受信者) が、入れ替わるという特徴を持っています。また、「発表モード」には、聴衆に向かって口頭で伝える活動だけでなく、ポスターやニューズレターなど文字を使って読み手に伝える活動も含まれます。

さらに、やり取りの言語活動といっても、場面や状況によってコミュニケーションの目的は、当然ながら異なってきます。例えば、「道案内」の活動では、

A: Excuse me. Where is Kobe station?

B: OK. Go straight for two blocks.

Turn right. You can find the station on your left.

A: Thank you.

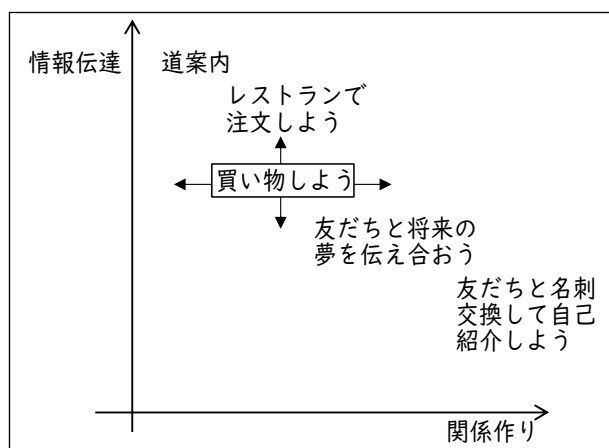
のように、相手の質問に対して、情報を正確に伝え、目的地までたどり着いてもらうことが目的となります。一方、「友だちと名刺交換して、自己紹介しよう」というやり取りの活動では、初対面の相手に名前や誕生日、好きなもの、趣味といった情報を伝えあうことを通して、クラスの友だちとの関係作りをおこなうことが大切な目的となります。

先に紹介したACTFLの外国語学習スタンダードでは、「対人モード」の言語活動が、その目的の違いから、次頁の図のように整理されています。縦軸は、活動における情報伝達の度合いを、横軸は、活動の中で相手と関わる度合い (関係作り) を表しています。このような観点から整理すると、授業でおこなわれている言語活動が、その目的によってどのように分布しているのかが可視化され、バランスの取れた活動作りを見通すことができます。

図中の言語活動の配置は、筆者の考えた一例です。同じ活動でも、教室での活動が、どのような目的や意図を持って実施されるかによって、分布は変わるでしょう。

例えば、「買い物」の場面で考えてみます。昨今は、入店してからひと言も発せずに、電子マネーで買い物を済ませることができそうですが、何かを買おうと迷っているときに店員か

ら気持ちよい接客をしてもらえると、（それがビジネスとは言え）また来てみようと思うものです。そういった場面でのやり取りでは、金銭や物の授受というより、「関係作り」の度合いがより強くなると言えます。



▲ 図 「やりとり」の言語活動の特徴 (Hall[2000]に基づく)

■コミュニケーションは一人で作れない

外国語活動での「話すこと（やり取り）」の目標には、「サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、（中略）質問をしたり質問に答えたりするようにする」（学習指導要領・外国語活動編、下線は筆者）という一節があります。友だちや先生から助けてもらいながらやり取りできればよい、という目標は、英語が少し苦手な子どもたちにとっても達成感につながります。これが、高学年になると外国語活動の経験を踏まえ、「質問したいことを自分と考えて質問したり、質問に対して自分と考えて答えたりし、自分の力で伝え合うことを目指す」（学習指導要領解説・外国語編、下線は筆者）とあり、「自分」でできることが強調されています。

しかし、やりとりの活動は、会話に参加する複数の人々の間で作られるもので、決して自分の力だけでできるものではありません。ですから、高学年の目標にも「お互いに助けあいながら…」とか「コミュニケーションを一緒に組み立てながら…」といった要素が入っていれば、児童も「やり取りらしさ」を

もっと意識できるのではないのでしょうか。コミュニケーションは単なる情報の発信→受信ではなく、常に他者とすり合わせながら、一緒に作っていく本質的に複雑なものです。言語活動の体験を通して、こういった気付きが、子どもたちに芽生えると素敵ですね。

■「あたま」「こころ」「からだ」を結びつける

そういった気付きを引き出すには、普段から、多様な考えをすり合わせ、思考と情動が伴うようなやり取りの活動をする必要があるでしょう。

例えば、英語で色の言い方を学ぶ単位では、教師が黒板のカードを指し、What color is this? … It's green/ pink/ red…と子どもが答える場面を見かけます。この問いを少しひねって、“What color is spring for you?”（みんなにとって春のイメージは何色？）とたずねてみます。すると子どもたちは、“Pink!” “Green!” “No, light green!” “It's yellow!”と自分たちの感性や体験に基づいて応答しはじめます（柳瀬・小泉、2015）。そして、“Why yellow?”と誰かがたずねると、「うちのまわり、菜の花畑なんだ」「あー、そうなんだ」となります。春の情景が目には浮かんできます。ついでに、“What color is winter for you?”, “What color is your future?”, “What color is our class for you?”（ちょっと怖い）などと問いかけると、やり取りはどう発展するのでしょうか。「あたま」だけでなく「こころ」と「からだ」も結びつけ（柳瀬・小泉、2015）、やり取りを一緒に作る経験を重ねることが、コミュニケーションに対する「見方・考え方」を身に付けるのに重要なのではないかと考えます。

【参考文献】

- Hall, J. K. (2000). *Methods for Teaching Foreign Languages: Creating a Community of Learners in the Classroom*. Pearson.
 柳瀬陽介・小泉清裕 (2015)『小学校からの英語教育をどうするか』岩波書店。



SDGs(持続可能な開発目標)からの学び

あさおか ゆきひと
東京農工大学 農学研究院 教授 朝岡 幸彦

(一社)日本環境教育学会 前会長・代表理事



【研究分野】環境教育、社会教育、持続可能な開発のための教育(ESD)、持続可能な開発目標のための教育(E-SDGs)等

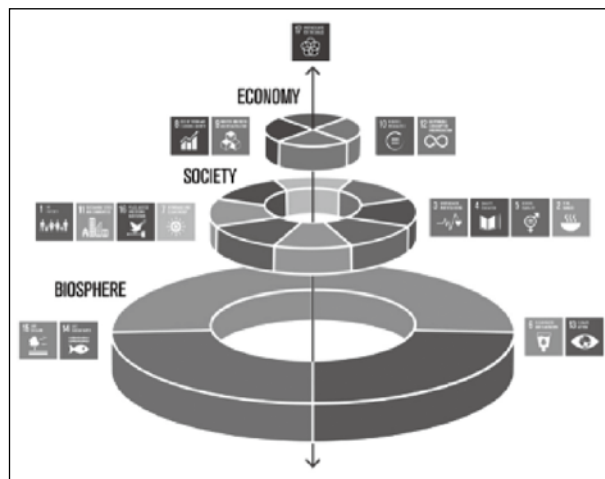
1 なぜSDGsなのか

「SDGs(エスディー・ジーズ)」という言葉が、世間に氾濫している。政府やマスコミにとどまらず、多くの企業が看板に掲げ始めているのである。なぜ、産業界までもがこれを謳わなければならないのか。それは、もはや「持続可能な開発目標(SDGs)」^(注1)の実現なしには、人類社会の存続も、経済活動も「不可能」であることが、誰の目にも明らかになってきたからである。あとは時間との競争であり、とりわけ気候変動に代表される地球環境問題の解決が「間に合うか」「間に合わないか」なのである。



▲ 図1 SDGsロゴ

「持続可能な開発目標(SDGs)」には、17の目標の中に169のターゲットが設定されている。これをウェディングケーキ・モデル(図2)^(注2)と呼ばれる区分に従って類別すると、それぞれの目標の位置付けと特徴が明らかになる。



▲ 図2 ウェディングケーキ・モデル

【環境(生物)圏に関わる目標】＝第一層

＜目標6＞ すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する

＜目標13＞ 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる

＜目標14＞ 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

＜目標15＞ 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する

【社会圏に関わる目標】＝第二層

＜目標1＞ あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる

＜目標2＞ 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する

＜目標3＞ あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する

<目標4> すべての人に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する

<目標5> ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う

<目標7> すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する

<目標11> 包括的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する

<目標16> 持続可能な開発のための平和で包括的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包括的な制度を構築する

【経済圏に関わる目標】＝第三層

<目標8> 包括的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する

<目標9> 強靱（レジリエント）なインフラ構築、包括的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る

<目標10> 各国内及び各国間の不平等を是正する

<目標12> 持続可能な生産消費形態を確保する

【パートナーシップに関わる目標】＝第四層

<目標17> 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

このウェディングケーキ・モデルでは、第一層を基盤に次第に積み上がっていく目標の特質がよくわかるとともに、まず喫緊の課題として「環境（生物）圏」に関わる目標を達成しなければ他の目標群の実現も困難になることが直感的に理解できる。これとは別に、国連広報センターは「SDGsのもうひとつの捉え方－5つのP」を提唱している（図3）^{（注3）}。これは、17の目標を

「地球（Planet）」「人間（People）」「豊かさ（Prosperity）」「平和（Peace）」「パートナーシップ（Partnership）」の5つに紐付けするものである。

SDGsのもうひとつの捉え方－5つのP



▲ 図3 SDGs 5つのP

2 SDGs実現の鍵を握る「教育」「パートナーシップ」

この目標4には、（いずれも2030年までに達成すべき）7つのターゲットと3つの手段が明示されている（下線は筆者）。

<4.1> すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする

<4.2> すべての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする

<4.3> すべての人々が男女の区別なく、手の届く質の高い技術教育・職業教育及び大学を含む高等教育への平等なアクセスを得られるようにする

<4.4> 技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事及び企業に必要な技能を備えた若者と成人の割合を大幅に増加させる

<4.5> 教育におけるジェンダー格差を無くし、障害者、先住民及び脆弱な立場にあ

る子どもなど、脆弱層があらゆるレベルの教育や職業訓練に平等にアクセスできるようにする

<4.6> すべての若者及び大多数（男女ともに）の成人が、読み書き能力及び基本的計算能力を身につけられるようにする

<4.7> 持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする

これらのターゲットの中で、SDGsの実現をもっとも端的に進めようとするものが、<4.7>に登場する「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development / ESD）」である。ESDは、2002年のヨハネスブルク・サミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）において日本政府等が提案した概念であり、その後、「国連・持続可能な開発のための教育の10年（2005年～2014年 / UN-DESD）」を経て世界に定着した新しい教育のあり方である。ちょうど、2000年の国連ミレニアム・サミットで採択された「国連ミレニアム宣言」の「ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals / MDGs / 2015年が目標年）」とともに広がり、MDGsの後継目標にあたるSDGsでも大きな役割が期待された。これは、ESDをSDGsの実現全体に関わるものとして前文に入れるべきであると日本政府を通じて提案してきたものの、「前文に入れても本文に入らないと各国で行動されないという問題に直面し、目標4のなかにESDを入れることになった」^{（注4）}と説明されている。

SDGsの実現のためにESDの役割が大きく期待されていることを表すものが、『ESD：SDGs達成に向けて（ESD for 2030）』（国連総会決議 / 2019年12月）である。その概要が、

次のようにまとめられている。

- ・2015年以降のESD実施枠組みで、世界で2,600万人がESDカリキュラムを学び、200万人の教育者がESD研修を受け、ESDの推進が大きく前進した。
 - ・『あいち・なごや宣言』で言われたように、また、ESDが質の高い教育に関するSDGに必要な不可欠な要素であり、その他の全てのSDGsの成功への鍵として、ESDはSDGsの達成の不可欠な実施手段である。
 - ・国際社会に対し、幼児教育から高等教育、遠隔教育、職業技術教育まで、すべての教育段階において包摂的かつ公正な質の高い教育を提供するよう求める。
 - ・加盟国政府及び他のステークホルダーが、『ESD for 2030』の実施を通じて、ESDの行動を拡大することを奨励する。
 - ・『ESD for 2030』の立ち上げの国際会議が、2020年6月にドイツ・ベルリンで開催されることに注目する。
 - ・2030年に向けた教育課題のフォローアップ及びレビューの場として、ユネスコが、『SDG－教育2030ステアリング・コミッティ』（日本人が共同議長を務める）の主導・調整機関の役割を引き続き務めるよう求める。
 - ・ユネスコが、ESDの主導機関として『ESD for 2030』の実施調整を担うよう求める。
 - ・国連事務総長に対し、第76回国連総会（2021年）にて、本決議に基づく実施状況レポートを提出するよう求める。
- （下線は原文）^{（注5）}

3 SDGsから「学ぶ」ために

さて、私たちは教育の現場において、このSDGsをどのように受け止め、理解し、教育実践に活用すれば良いのであろうか。まずは、子どもたち（児童・生徒）とともにSDGsの各目標の背景にある世界の「現実」について、できるだけ深く学ぶことである。各教科の単元に取り込める項目もあるが、「総合的

な学習（探究）の時間」等の自由度の高い枠組みの中で、子どもたちとともに学びたい。SDGsが示す世界（地球）の「現実」には、ある意味において答えがない。「未来の世代」の代表である子どもたちとともに、教師や私たち大人が「現実」を受け止め、答えを模索せざるを得ないものと考えた方が良いだろう。私たち大人が試されているのである。

もちろん、SDGsの目標を実現するために、私たちが直ちに行動を求められる具体的な指標がある。例えば、目標13（気候変動）対策として、第21回国連気候変動枠組条約締約国会議（COP21）のパリ協定（2015年12月）で合意された「世界共通の長期目標として2℃目標の設定。1.5℃に抑える努力を追求すること」を実現するために、CO₂を含む温室効果ガスを大幅に削減することは喫緊に求められる行動である^{（注6）}。他方で、目標16（平和と公正）のように「決して実現できなくても、絶えずそれを目標として、徐々にそれに近づいていこうとする」行為そのものに意味のある、カントの統整的理念に近いものもある。たとえ目標が具体的に明示されていても、それを実現するための方法を考えなければならないものもある。

つまり、SDGsそのものが学習の対象であり、それをめぐって考え、議論することが求められているのである。その意味では、教師は子どもたちに安易に答えを用意すべきではないし、この状況を共有する一人の人間として真剣に子どもたちと考えることが求められるのではないだろうか。

さらに教師という立場から考えると、子どもたちとともに学ぶことにとどまらず、目標4（教育）の実現に率先して努力する責任がある。この目標は、目の前にいる子どもたちとは別の世界にある問題ではなく、制度や政策が変わらなければ何もできないものでもない。グローバリゼーションのもとで、さらに新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックのもとで、私たちの身の回りの世界でも教育の格差が問題となっており、教

師はこれらの「現実」に対して何もしなくても良いということにはならない。

SDGsは世界に変革を求めるものである。これを「学ぼう」とすることは、自らが世界を変革し、持続可能な未来を実現しようとする熱意と志が試されるのである。

注

- 1 「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」（日本語（外務省仮訳））/国際連合広報センター・ホームページ
(https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/) より
- 2 スウェーデンのレジリエンス研究所ヨハン・ロックストローム所長が考案したモデル
(<https://sdgs.media/blog/3834/>)
- 3 「SDGsを広めたい・教えたい方のための『虎の巻』」（国連広報局が2016年に作成したプレゼンテーション資料の日本語版。国連広報センターが編集。パワーポイントスライド32枚）
- 4 阿部治・野田恵編著『知る・わかる・伝えるSDGs I 貧困・食料・健康・ジェンダー・水と衛生』学文社、2019年
- 5 日本ユネスコ国内委員会「『持続可能な開発のための教育：SDGs達成に向けて（ESD for 2030）』について ～第74回国連総会における決議採択～」
(https://www.mext.go.jp/unesco/001/2019/1421939_00001.htm)
- 6 外務省「気候変動に関する国際枠組み_2020年以降の枠組み：パリ協定」
(https://www.mofa.go.jp/mofaj/ic/ch/pagelw_000119.html)





国語科の授業実践 宮沢賢治「永訣の朝」

～複数テキストを読み取る～

県立宝塚東高等学校 教諭 高屋舗 亜望 たかやしき あみ

1 はじめに

ここでは、昨年度まで勤務していた県立宝塚北高等学校における実践より、詩教材を東京大学CoREF（高大接続研究開発センター 高大連携推進部）の提唱する知識構成型ジグソー法（以下「ジグソー法」）によって読み取った取組について報告する。

平成28年12月中央教育審議会によって出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」において、「学力に関する調査においては、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し説明したりすることなどについて課題が指摘されている」との記述がある。自らの考えを述べていく過程では、まず「読む」という活動が必要である。「読む」ということにおいても以下のような指摘がある。

「子供たちの読書活動についても、量的には改善傾向にあるものの、受け身の読書体験にとどまっており、著者の考えや情報を読み解きながら自分の考えを形成していくという、能動的な読書になっていないとの指摘もある。教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであり、文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である」とあり、単なる「読み取り」の授業から脱却しつつ、読み取ったことを書く・話すといった活動を通して、「思考力・判断力・

表現力」の育成を図りたいと考えた。

2 学力向上サポート事業での取組

県立宝塚北高等学校では、平成30年度から3年間、県教育委員会の学力向上サポート事業の指定を受けた。その際、「新たに実施される『大学入学共通テスト』に対応した学習・指導方法を研究する」という研究テーマが与えられた。そこで、大学入学共通テスト施行調査の分析を行い、どのような学習・指導方法を行っていくのか検討した。

平成30年度施行調査は、これまで扱われなかった詩とエッセイを関連付けて読み取る問題や、故事成語の出典となる文章（現代語訳）と漢文を比較して漢文を理解する問題の出題もあり、言葉が含まれる図表や、異なる表現、文章以外の情報も問われていた。

また、記述式問題については、探究レポートを書くに当たって、文章を読んで考えをまとめる場面で、文章の構成や展開をとらえるなど、テキストを的確に読み取る力、及び言語活動の目的に応じて思考したことを表現する力を問う問題の出題があった。記述式問題の出題範囲となる主たる題材が、論理的な文章、実用的な文章、又はそれらの組み合わせとなる予定であった。

大学入学共通テスト施行調査の分析結果より、授業の取組を以下のように設定した。

- ① 素早く正確に複数のテキストを読み解く力の育成
- ② 読み取った内容を整理し、表現する力の育成

そして、授業手法にはジグソー法を用いることとした。聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの活動を通して、思考力を深めることのできるような授業実践には、ジグソー法が丁度良いと考えたためである。

また、ジグソー法の手法であれば複数のテキストを比較、検討する練習が容易に授業内へ組み込めるのではないかと考えた。また、

3 ジグソー法について

東京大学CoREFの提唱するジグソー法の手順は以下の流れである。

- ① 教員が問いを設定する。この時、既に知っていることや、3つか4つの知識を部品として組み合わせることで解けるものになるように設定し、その問いを解くのに必要な資料を、知識のパートごとに準備する。
- ② 生徒は、問いに対する答えを一人で考え、記入しておく。
- ③ 同じ資料を読み合うグループを作り、その資料に書かれた内容や意味を話し合い、グループで理解を深め、担当する資料について整理し、解釈できるようになることをめざす。この活動をエキスパート活動と呼ぶ。
- ④ 次に、違う資料を読んだ人が一人ずついる新しいグループに組み替え、さきほどのエキスパート活動でわかってきた内容を説明し合う。このグループでは、元の資料を知っているのは自分一人なので、自分の言葉で自分の考えが伝わるように説明することになり、この活動を通して、自分の理解状況を内省し、新たな疑問を持つ活動につながる。同時に他のメンバーから他の資料についての説明を聞き、自分が担当した資料との関連を考える中で、理解を深めることができる。理解が深まったところで、それぞれのパートの知識を組み合わせ、問いへの答えを作る。
- ⑤ 答えが出たら、その根拠も合わせてクラスで発表する。他者の意見に耳を傾けて、それぞれが全体への発表という形で表現を

し直すこととなる。互いの答えと根拠を検討し、その違いを通して、一人ひとりが自分なりのまとめ方を吟味するチャンスが得られ、一人ひとりが納得する過程が生まれる。この活動をクロストークという。

- ⑥ 最後は、はじめに立てられた問いに再び向き合い、一人で問いに対する答えを記述する。

4 授業実践 宮沢賢治「永訣の朝」

大学入学共通テストでは、今までの大学入試センター試験では見られなかったような詩やエッセイ、短歌といったジャンルからの出題が予想されていた。そこで、現代文Bの授業において、宮沢賢治「永訣の朝」という詩作品を扱うことにした。

【授業の到達目標】

教科書本文と複数のテキストを比較検討することで、本文内容をより深く読み取り、文章の内容や構造を把握し、精査・解釈したことを自分の言葉で明確に表現できるようになることとした。また、表現の際は、構成を検討し、その記述の仕方、発表の仕方に工夫することをめざした。

【事前学習】

生徒には事前学習として以下の内容に取り組ませた。

- ① 便覧などで宮沢賢治について調べてまとめる。
- ② 本文を「表現に関すること」、「色彩に関すること」、「時間の流れ・行動に関すること」の3つの観点で整理するワークシートを使い、永訣の朝について個人で詩の本文整理する。
- ③ 作品を読み、その時点での主題考察を書く。

【授業の実際】

ワークシートに個人で事前学習の内容について整理した時点では、「妹の死の衝撃」について書かれたものが多かった。

32 月刊「兵庫教育」2021年12月号

3人のグループを作り、それぞれの資料を読み解かせ、内容や構造を整理し、読み取った資料と本文の共通点や相違点、などについてワークシートにまとめさせた。

その後、A、B、Cそれぞれの資料を読み取った者でもう一度3人グループを組み直した。そこまで読み取ってきた資料について、整理してきたことをお互いに説明しあい、わかったことをワークシートへ記入させた。

すべての資料をもとにして、宮沢賢治や「永訣の朝」についての議論を深め、「永訣の朝」の主題考察についてのまとめをグループで作成した。

まとめは、B4の用紙にまとめさせた。その際、発表を意識した作りになるようルーブリック評価表を配布した。

各班でまとめたB4の用紙を全員にコピーして配布し、班ごとに発表させた。

発表を聞いてわかったことや気づいたことについて、ワークシートへ記入させた。

最後は、自らの班のまとめ発表の内容だけでなく、他の班の発表内容も参考にしながら、もう一度個人で主題についての考察を書かせた。

5 まとめ

各班の発表はこちらの予想を超えたものが多くあり、宮沢賢治自身の思想や、宗教的価値観、死生観、妹の死の意味の考察といったことから、他作品との比較、他教科での学習内容と融合させた作品論など、多岐に渡っていた。

終了後の生徒アンケートにおいても、次の

▼ ルーブリック評価表

「永訣の朝」				
参加態度(班内活動)	4	3	2	1
本文理解と整理	非常に多くの情報収集・内容整理がしてある	基礎的な情報収集・内容整理がある程度してある	話題に関する情報収集や内容整理があまりない	話題に関連する情報が全くない
情報共有	話題に関連するすべての情報を非常に多く伝達している	多くの話題に関連した基礎的な情報がある程度伝達している	話題に係る情報を一部伝達している	共同作業者に情報を全く伝達していない
グループ作業への取り組み	決められたメンバーとしての役割を果たしている	ほとんど全ての役割を果たしている	ほとんど役割を果たさない	決められたメンバーとしての役割を全然果たさない
まとめプリント	4	3	2	1
構成	論理的な構成のもと、意見を根拠立てて書けており、発展的で興味深い	論理的な構成のもと、意見を根拠立てて書けており、第三者が読んでも内容を把握できる	体系だてて説明されておらず、内容について把握するのが難しい	構成が適切に組み立てられておらず、内容を理解できない
発表	4	3	2	1
内容に関する知識	内容の知識を十分に実証し、質問に答え、かつさらに詳しく説明できている	内容についてすべてこたえられているが、さらに詳しく説明できていない	内容の知識に自信はないが、初歩的な質問には答えられている	内容の知識が乏しく、内容に関する質問に答えられていない
考察	根拠と理由を明示し、詳しい考察をすることができる	根拠や理由に不十分な点はあるが、考察がなされている	根拠や理由がなく、考察も著しく乏しい	全く考察がなされていない

ような意見がでた。

- ・何度も読み返すことで、自分たちなりの解釈をし、理解を深めることができた。
- ・自分がまとめてきたことと、発表している人の内容の繋がりを意識することによってイメージできることが増えた。
- ・事前に考えていたことより、理解が深まり楽しい活動だった。
- ・一つの作品について深く検討できたことが、良い経験だった。

はじめに本文のみをもとにして個人で書かせた主題や考察、気づきよりも深い読み取りに発展させることができた。

今回は、ジグソー法といった手法を使うことで、こちらの用意していた解答例を超えたものが多くみられた。

授業の発表、まとめの際には、神戸女学院大学から吉田和志先生にお越しいただき、授業参観、指導助言をしていただいた。読み取りの深さや生徒の活動について、毎回のコメントシートを生かしており、活発なものであったとの振り返りをいただいた。また、評価やワークシートについて、今後も引き続き研究が必要であるとのことのお言葉もいただいた。

今後の授業においても、読み取ったことを書く・話すといった活動を通して、「思考力・判断力・表現力」の育成を図るような取り組みを続けていきたい。

働きがいのある 学校づくりに向けて

10



学校事務の業務改善に向けて

～姫路市立小中義務教育特別支援学校
事務職員協議会活動の取組から～



姫路市立広峰小学校
学校副主幹

いわみ まりこ
岩見万里子



姫路市立野里小学校
学校副主幹

まえひがしみ なこ
前東美奈子

1 はじめに

姫路市立小中義務教育特別支援学校事務職員協議会（以下「協議会」）の活動は、学校事務の確立を図り、学校運営を担う職員として学校教育の向上発展に寄与すべく、学校事務を推進するための研究・研修を行い、会員相互の情報共有及び親睦を図ることを目標に日々活動している。

姫路市では現在小学校66校、中学校32校、義務教育学校3校、特別支援学校1校の計102校、130名で学校事務の標準化、効率化、及び各々の資質の向上を図るために活動し、姫路の教育に貢献できるよう取り組んでいる。今年度は2名の加配事務職員が配置されており、組織的に業務改善を図っている。

2 学校業務改善のための協議会活動

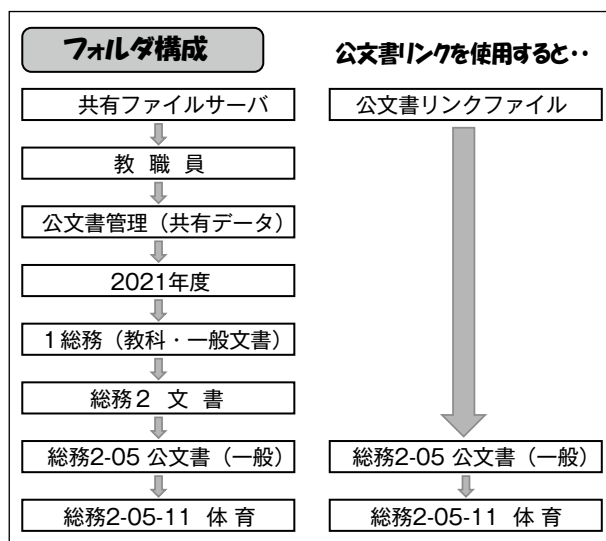
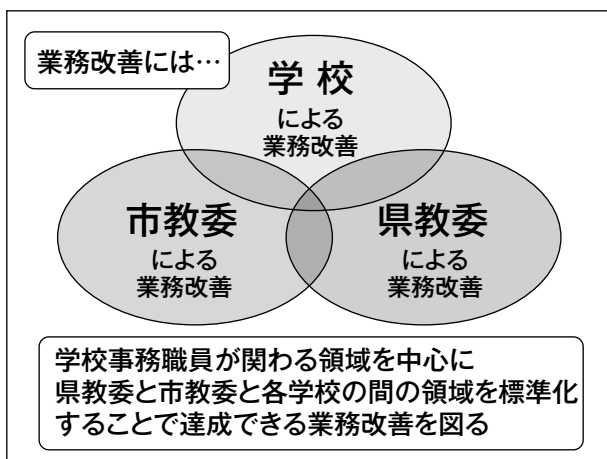
県教委による業務改善、市教委による業務改善、各学校による業務改善があるが、協議会では、学校事務職員が関わる領域を中心に、県教委と市教委と各学校の間の領域を標準化

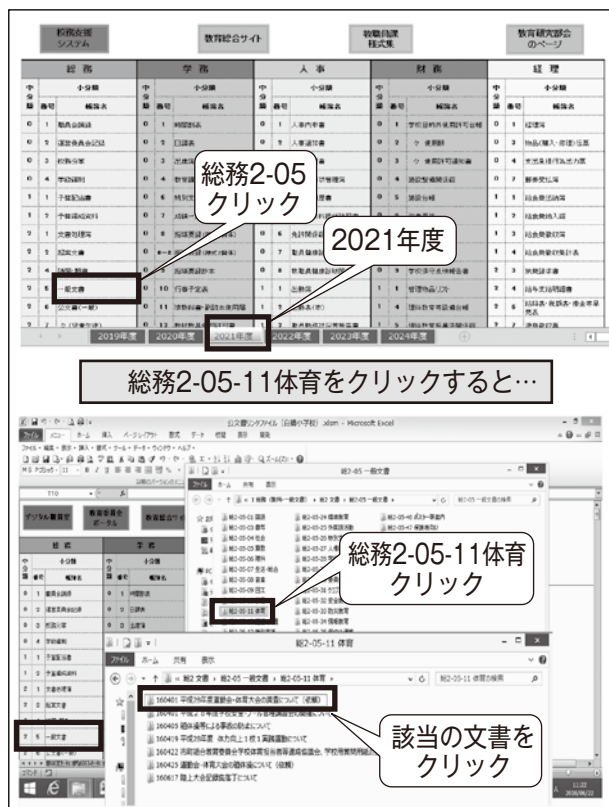
することで、事務職員だけでなく姫路市内の全ての学校の教職員の業務改善を図ることをめざしている。

3 具体的な取組例

(1)「公文書リンクファイル」の活用

市内全ての学校で、「姫路市立学校事務諸表簿基準一覧表」に基づき、文書（紙媒体・電子データ）の集中管理をしている。データ文書は各校事務職員が「公文書管理フォルダ」に保存しており、担当者は、協議会作成の「公文書リンクファイル」を活用することにより、保存したデータを簡単に検索できるようになっている。また、報告する文書も同じファイルに保存することによって、いつでも誰もが必要な時に必要な情報を活用することができる。ファイル名の変更や年度のシートの追加等、市内全校で使用できるように必要に応じてメンテナンスを行っている。



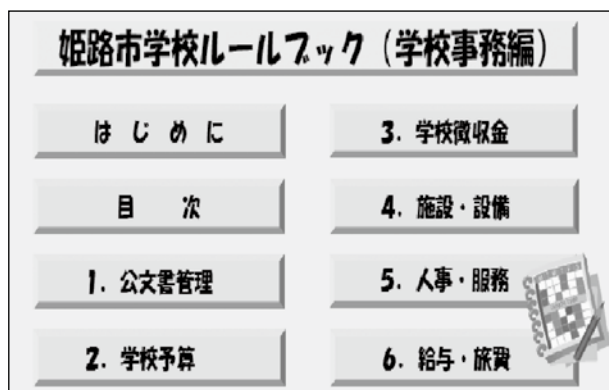


▲ 公文書リンクファイル

(2)「姫路市学校ルールブック（学校事務編）」の活用

姫路市全体での学校事務のルールをまとめた「姫路市学校ルールブック（学校事務編）」は、市教育委員会のポータルサイトに掲載することで、姫路市の教職員が、誰でも自由に必要に応じて、学校予算・サービス・給与等の資料や手続きを閲覧・利用できるように作成している。

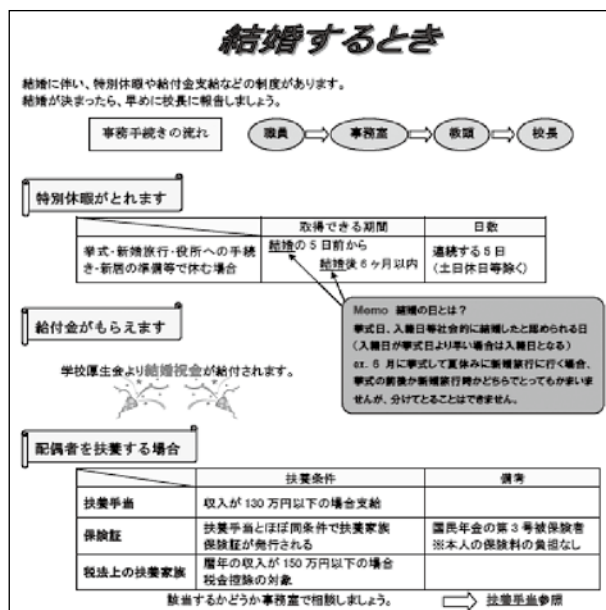
姫路市学校ルールブック（学校事務編）を活用することによる効果は次のとおりである。



▲ 姫路市学校ルールブック（学校事務編）メニュー画面

- ①市全体で学校事務の標準化が進み、学校異動時の教職員の負担軽減につながる。
- ②各学校で担当者が個別に作成してきた文書管理・学校予算・サービス・給与等の教職員向け資料作成のための時間が大幅に短縮される。
- ③事務負担の軽減と経費の節約にもつながる。
- ④事務処理のルールを標準化することにより、姫路市全体のコンプライアンスの向上につながる。

各担当者にとっても、各々が資料を作成する必要がなくなり、職員へ必要な情報を提供することでより適正な事務につなげることができる。各自の校務用パソコンのデスクトップ



▲ 姫路市学校ルールブック（学校事務編）の一例

プに貼付しての利用、また「公文書リンクファイル」の画面からも市教育委員会ポータルサイトにリンクさせるなど、誰もが利用しやすい環境となるよう工夫している。

統一した資料の活用により、各学校で職員へ啓発する機会も増え、市内の学校事務の標準化につながっている。

(3)「備品管理システム」の活用

市内の学校では、市教育委員会作成の備品リストを使用していたが、庁内共通のため教科や保管場所の項目がなく、学校現場では利用しにくい仕様となっていた。そのため現在は、学校現場で使用しやすいように、協議会が学校用に開発した「備品管理システム」を活用している。備品リストは教科や保管場所ごとの一覧表が即時に作成できるため、どんな備品がどこにあるかを容易に把握でき、各校で教科担当者が行う備品点検や予算委員会に向けて購入計画や廃棄計画も立てやすくなった。市教育委員会に報告する廃棄申請等の様式もボタンひとつで作成可能になっている。

児童生徒の学びをより深める手段のひとつとして「備品管理システム」を活用し、効果的・効率的な備品管理を行うことにより、備品の有効活用を図り、業務改善につなげている。

備品管理システム 2019	
備品入力	新規に備品データを入力します
保管場所・業者入力	保管場所、購入業者名を入力します
学校備品リスト	入力済みの学校備品リストを表示します この画面からも、「備品入力」「検索」「印刷」ができます
検索	教科、保管場所、購入業者を選択し検索／印刷します 品名コード一覧、廃棄備品一覧を表示／印刷します
印刷	選択教科、全教科、管理備品、保管場所別、廃棄備品一覧表 物品管理連絡票、学校備品リストを印刷します
保存	学校備品リストを保存します
データ更新	データを更新します
Excel 終了	

▲「備品管理システム」メニュー画面

4 各関係機関との連携

各学校、個人の取組で可能な改善には限りがあるため、協議会活動において様々な業務

改善を推進している。しかし、協議会のみでの活動にも限界があるため、業務改善をさらに進めるには、各関係機関との連携は必要不可欠である。教育事務所、市教育委員会、校長会とはそれぞれに毎年定期的に話し合いを行い、業務改善を図っている。協議会だけでは進めることが困難な事項も、立場が異なる各関係機関と課題や問題点を共有し、知恵を出し合い協力・連携することで、毎年少しずつであっても業務改善を進めることができている。協議会としてこのような取組を継続していくことも重要であると考えている。

5 おわりに

取組例をいくつか紹介したが、これらは姫路市における学校事務領域の標準化につながるものである。中核市である姫路市は、校種や規模、地域性は多様で、それぞれの学校の特色があり、すべてを標準化することは難しいが、公文書管理や、備品管理など可能なものを標準化していくことが業務改善につながると考えている。これによって、教職員の学校異動時の負担も大幅に削減できる。今では市内すべての学校で、協議会が作成したシステムの活用が進んでいる状況にある。

私たちは、各学校での個々の取組は勿論必要であるが、協議会組織の活動の中で、事務職員の専門性を活かして学校現場の業務の改善につなげ、姫路市内全体の学校教育のために、時代に合わせた柔軟な取組を継続する努力が必要であると考えている。



特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導(第98回)

「教育・家庭・福祉の効果的な連携」

～伊丹市の事例～

伊丹市立鴻池小学校 校長 みやたに 宮谷 かずのり 和教

1 はじめに

本校は、「ひとみ輝き 笑顔あふれる 鴻池小学校 ～『やってみよう!』と言える子どもを育てる～」を学校教育目標に特別支援教育を推進しています。

現在、28名の特別支援学級児童と5名の通常学級児童が、伊丹市をはじめとして、宝塚市、川西市、大阪府池田市など21の放課後等デイサービス事業所（以下「放課後デイ」）に通っています。一人の児童が、複数の放課後デイに通っている場合もあります。

2 外部関係機関等との連携に向けて

(1) 現状

平成24年4月に児童福祉法の改正により、放課後等デイサービス事業が始まり、学校においては以下の問題が生じました。

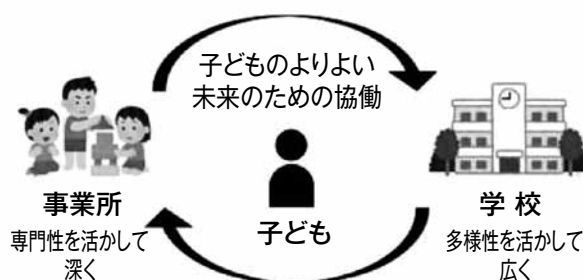
- ・放課後デイの送迎車と下校時の児童の安全確保
- ・連絡なく下校時刻に遅れてくる放課後デイへの対応
- ・学校と保護者間での情報の共有が十分ではなく、引渡しのルールが不明確
- ・学校と放課後デイの情報の共有が十分ではなく、放課後デイから学校での子どもに関する情報提供の際の対応

(2) 本校の取組

本校では、平成31年3月の兵庫県特別支援教育第三次推進計画に示された、就学前から卒業後へとつなぐ「縦の連携」と、教育と保健・福祉・医療・労働等の関係機関や地域住民がつながっていく「横の連携」について、「子どものよりよい未来のために協働していきましょう」という方向性を教職員が共通理解することからスタートしました。そして、令和元年6月に本校の特別支援教育コーディネーターが中心となって、外部関係機関等との連携に関する基本方針を作成しました。基本方針（図参照）の作成により、外部機関のみならず、教職員の理解もさらに進むことになりました。

また、保護者宛てに手紙を配布し、次の3点について学校と保護者との連携を図りました。

- ・放課後デイの利用の有無をはじめ、利用する施設を明確化
- ・児童引渡しの際に、学級担任による引渡しや引継ぎの有無
- ・連絡先を明記することによる不測の事態への対応



▲ 図 外部関係機関等との連携に関する基本的な考え方（基本方針より抜粋）

(3) 市の取組

昨年度改訂された伊丹市の「今後の特別支援教育のあり方」（基本方針）においても、放課後デイ等との連携について、5つの重点項目の1つとして掲げられ、外部機関との効果的な指導・支援について情報を共有することなど、その重要性の理解が進みました。

3 おわりに

これらの取組以外にも、連携・推進にあたっては、次のような取組が必要です。

- ・学校窓口の担当者（例：特別支援教育コーディネーター等）を明確にする。
- ・放課後デイの学校への車の送迎についてルールを明確にする。
- ・警報発令時の緊急時の対応のあり方について、共通理解を図る（特に登校後に警報が発令された場合の対応について）。
- ・情報共有等のため、放課後デイによる学校訪問についての流れを確立する（保護者からの申し出→事業所→コーディネーターとの日程調整→訪問観察の実施）。

今後も児童が安心・安全に放課後デイを利用できるように、また、一貫した支援ができるように学校と家庭と福祉の連携を一層推進していきます。

(小) 国語科授業実践講座 ～「読むこと」領域の授業づくり～

県立教育研修所 義務教育研修課

1 はじめに

今回は小学校教員及び特別支援学校教員を対象とした「(小)国語科授業実践講座 -『読むこと』領域の授業づくり-」の様子を紹介する。

本講座は、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する授業の在り方と評価についての理解」と「主体的・対話的で深い学びを実現するための1人1台端末の活用についての理解」をねらいとして、学識者による講義と県内教員による実践発表、それらを踏まえた演習からなる内容で実施した。

2 講義(全体 約90分間)

「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成に向けた指導と評価の充実-言葉による見方・考え方を働かせて-」のテーマで、兵庫教育大学大学院 吉川芳則 教授から、学習指導要領が求める資質・能力及び授業づくりを中心に言語活動を重視した具体的な授業例を交えてご講義いただいた。

前半は「ひょうごつまずきポイント指導事例集」(H29年度)や全国学力・学習状況調査の結果から指摘された本県の児童の「読むこと」に関する課題等について、後半はそれらを踏まえ「読むこと」領域の授業づくりの充実に向けた「批判的読み(クリティカル・リーディング)」と「複数の情報を活用する読み」について講義いただいた。

【本県の児童の「読むこと」に関する現状(課題)】

- ・ 学習内容について、自分の考えをもち、読んだり、表現したりすること。
- ・ 目的や意図に応じ、必要な情報を基に自分の考えをまとめること。

【求められる力】

「目的や意図に応じて複数の資料(情報)を用いて自分の考えを表現する力」を育てること。

【批判的読み(クリティカル・リーディング)】

- ・ 「文章(ことば、論理)」に納得や疑問などの感想をもつなど、反応することが批判的読みの基盤になる。それを踏まえ、授業では読みの目的を「筆者について考える(読む)」と「自分の考えをつくる」の二つのいずれかに重点を置くことが大切である。読みの目的を持った上で、必要性、妥当性、整合性などの「読みの観点」を機能させながら、読みの対象として捉えた事柄(内容)や理論を、言葉でつないで実感したり具体化したりしていくことが大切である。

【複数の情報を活用する読み】

- ・ 他の教材(作品、文書)や他の児童生徒の読みと比較したり重ねたりすることが必要である。
- ・ 黒板等にある(複数の)ことば(キーワード、考え)を使って、新たな自分の考えを表現する。

後半は1人1台端末を活用した授業場面例の紹介と評価についてご講義いただいた。

【1人1台端末活用場面例】

- ・ 自分の考えをまとめる場面においては、コメント機能を生かして、自分の考えを文章でまとめ、入力することができる。
- ・ 考えを共有する場面においては、友だちに対する感想や児童の考えを再び投稿すること、児童が考えたり気づいたりしたことについて、自分の立場や意見を考え、意見を投稿し全体で共有することができる。

【評価について】

- ① 付けたい力を明確にする
 - ・ 学びの質を見取るために、付けたい力を教員が明確にもっておくこと。
- ② 「目標-指導-学習-評価」の一体化を図る
 - ・ 児童がどこでつまづいているかを単元の途中段階で把握し、不十分な点を補い、再度確認や促しを行っていくこと。

③簡便なものにする

- ・ 細かな評価基準の作成が目的化したり授業での活用そのものが負担になったりしないようにすること。
- ・ 単元の節目での評価を意識すること。

国語科における「読むこと」領域の授業づくりで求められる、自分の考えを「もつ」「つくる」という言語活動を重視した指導と評価について理解を深めることができた。

3 実践発表(全体 約30分間)

言語活動の充実をめざし、先進的な授業実践に取り組まれている県内教員に、その意図や方法について発表していただいた。内容は、教材「大造じいさんとがん」、単元名「椋鳩十作品の魅力をリーフレットで伝えよう!」についての実践である。

【単元における学習過程の例】

- ・ 学びの必然性と見通しをもたせる (第1次)

単元に入る前から話題を提示しておく。椋鳩十の魅力をリーフレットにまとめて図書館利用者に紹介するという見通しをもたせる。

- ・ 習得する (第2次)

「大造じいさんとがん」をモデルに椋鳩十作品の魅力を(相互関係や心情、人物像、優れた表現)の視点で読み解く。

- ・ 活用する (第3次)

「大造じいさんとがん」で学んだ3つの魅力の視点を生かして自分が選んだ椋鳩十作品の魅力について考える。

異なった作品に魅力を感じた者どうしで、椋鳩十作品に共通する魅力を考えリーフレットにまとめる。

受講者は、実践発表を日々の実践に引きつけながら、言語活動の充実に向けた単元計画の在り方について理解を深めることができた。

4 演習(個人、グループ 約120分間)

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方ータブレット端末等を活用し、自分の考えを形成する学習過程を重視した指導の工夫ー」をテーマに、第5学年の説明的文章を活用して、次のような手順で演習を行った。

【手順】

- ①教材を読み、要旨をまとめる。
- ②子どもがどんなことに難しさを感じたりつまずいたりしそうかを考える。
- ③予想したつまずきから、どんな力を身に付けることが必要かを考える。
- ④単元計画を基に、要旨をまとめる本時までに必要な手立て、展開、単元におけるICTの活用場面や方法について考える。

①②のそれぞれについて、受講者はまず個人で考え、その後、他の受講者と考えを共有することで、自分自身になかったつまずきの予想や育成すべき資質・能力について気付くことができた。そこでは、受講者どうしでタブレット端末等を生かし、自分の考えを共有する場面を設けた。

日々の授業の中で「自分の考えをまとめる」という「考えの形成」の学習過程を充実するために、上のような手順を教員があらかじめ考えることは、子どもを主体とする授業づくりにおいて重要であると考えた。

また、「読むこと」領域における言語活動の充実に向け、学習指導要領解説を用いて学習過程を確認するとともに「本単元でICTを活用した場合、どの場面でどう活用できるか」について、育成すべき資質・能力を踏まえ、日々の授業でどのような取組ができるかを考え、交流した。

5 研修を終えて

本研修を振り返った受講者からは「読むこと」領域の課題を踏まえ、付けさせたい力を意識して授業づくりや単元構成を行うことの大切さや読みを深める発問の視点について、数多くの手掛かりを得られたとの声を聞くことができた。

1日の研修を通して、文章を読んで理解したことに基づいて、文章と筆者のものの見方・考え方に対する自分の考えをしっかりともし読みの在り方について、実践的な側面から理解を深めることができた。

1人1台端末の効果的な活用についても、各領域において、学習過程を明確にし、活用場面を考えていくことの重要性に気付くことができた。

最後に、本講座が、子どもたちの言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成に寄与することを願っている。

ひまみ

スクラップを整理していたら、週に一度のページ・神戸新聞文芸の切り抜きが目に入った。読者投稿の随筆、詩、短歌、俳句、川柳などを載せている。切り抜いていたのは小学校低学年の作品だ。紹介しよう◆2014年4月の川柳部門入選作。お題は「眉」。「まゆげはね 何をするのか 分らない」(鈴木真唯)。9歳と選評にある。いいなあ。教えてって言われても返答に詰まるけれど◆2016年7月の川柳部門特選。お題は「貸す」。「ゆめかします 子どもだけです 無料です」(中山実梨)。10歳。これもいい。貸してくれる夢って何? 大人には教えてくれないだろうな◆2013年12月掲載の詩部門入選作「ひまわり」(しみずゆま)。8歳とある。「がっこうで ぶんきょうが ぜんぜん わからへん なった」。お母さんに打ち明けていたら、妹が「ひまみ みよ」と言って手を引っ張ってくれた◆「ひまみ」って何だろうと思っただけでいくと、「おおきな ひまわりが かぜに ゆらゆら ゆれていった。見ていたら「なんだか ゆうゆう だいじょうぶ だいじょうぶ わからへんことが だいじょうぶ やでって いうたように おもた」。全文ひらがなの詩はまだ続くのだが、ここまででついほろりとした。読んで思わず泣いたという男性の話も数日後の紙面に◆コロナ禍の1年。終わりに、せめて心地よい風を。

神戸新聞社特別編集委員兼論説顧問

林 芳 樹



★ ☆ お 知 ら せ ☆ ★

年間購読に関する 継続希望調査のお知らせ

来年度(令和4年度)の継続購読に関する調査用紙を1月号に同封予定です。変更のある場合は必ずご申請ください。
なお、**申請のない場合は継続希望として手続きを行います**ので、ご了承くださいませようお願いいたします。

☆ご意見・ご感想、投稿に関するお問合せは編集室にご連絡ください。
☆実践報告、随想、部活動紹介、校内研修の取組、子どもの作品(詩、図画工作、習字)など、教育にかかわる投稿を募集しています。



電話 0795-42-3101 FAX 0795-42-3449

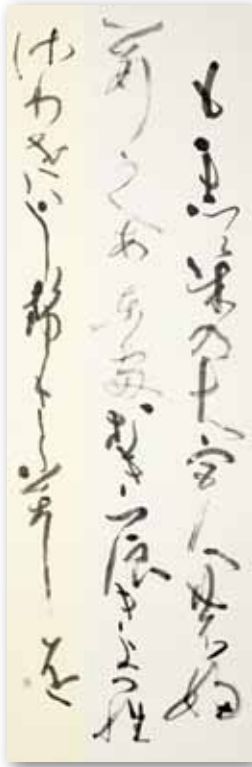


- ◆今月号は、「共生社会の実現に向けて、全ての学校園や学級に障害のある幼児児童生徒が在籍することを前提に、一人一人の教育的ニーズに応じ、自立と社会参加を見据えたきめ細かで適切な教育的支援について考える」を執筆意図として発行しました。そして特集論文を読んで、特別支援教育を推進する上で、「双方向の視点」をもって教育活動を行うことの大切さを実感しました。
- ◆最近、一通のファックスが編集室に届きました。永年勤めた仕事を退職され、今は教育に関係した仕事をされている読者からです。前職は教育に関係がなかったので、本誌を定期購入して、兵庫の教育について学んでいるとのこと。本誌に好感を持ってくださり、編集の参考となるご意見もいただきました。とてもありがたきと思うと同時に、その意欲的に学び続ける姿に感動しました。

(まつもと・たかはし)

わたしの作品

〈書〉



県立吉川高等学校
3年生 片山 莉央
「もしきの…」

〈絵〉



加東市立鴨川保育園
5歳児 よしだ さら
「ぬまのぬし」(絵本「やまなしもぎ」から)

〈貼り絵〉



明石市立二見北小学校
4年生 和泉 朱起
「アニマルコラージュ」

〈詩〉

お母さん いつもありがとう
三年生 中島 叶翔
サッカーのしあいでも
いつもえがおで見られる
がんばれと言ってくれる
そのがんばれがすぐうれしかったな
お母さんは
いつもおいしいごはんを作ってくれる
家事などもしてくれる
いつもありがとう

多可町立松井小学校
3年生 中島 叶翔
「お母さん いつもありがとう」

1月号予告

■特集

コロナ禍により学校教育はどう変わったか？

■論文

上智大学 総合人間科学部 教授 奈須 正裕

■教育実践

洲本市立加茂小学校

姫路市立安室中学校

県立国際高等学校

月刊「兵庫教育」

購読申込み

兵庫県立教育研修所 月刊「兵庫教育」係

〒673-1421 加東市山国2006-107

TEL (0795) 42-3100

FAX (0795) 42-5393

<https://www.hyogo-c.ed.jp/~kenshu/>

※月刊「兵庫教育」購読申込書は研修所のホームページからダウンロードできます。バックナンバーの購入も可能です。

■編集

兵庫県立教育研修所

代表 小山 智久

〒673-1421

加東市山国2006-107

TEL (0795) 42-3100 FAX (0795) 42-5393

■発行

兵庫県教育委員会

〒650-8567

神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL (078) 341-7711

■印刷

株式会社ブリテック

〒669-2333

丹波篠山市南新町67-1

TEL (079) 552-0261 FAX (079) 552-2484

香美町立村岡小学校
もくもくホールでの給食



小野市立大部小学校
上級生が下級生の手を取り、植え替え方を伝授する様子



丹波篠山市立今田幼稚園
おそろいのTシャツでダンス！ダンス！



姫路市立高浜幼稚園
ヨウシュヤマゴボウで色水遊び
「きれいな色やる？」



県立有馬高等学校（定時制課程）
サンタクロースに扮し、地域の子どもたちと交流する様子



洲本市立烏飼小学校
わたしたちの町とはぜんぜん違うんだね
（尼崎市の小学校との遠隔交流授業）



神戸市立御影中学校
校外学習（六甲山）での昼食時間の一コマ



三田市立三田幼稚園
楽しいな！玉入れごっこ

1月号 予告

※写真掲載した学校園は「トピックス」で紹介しています。

コロナ禍により学校教育はどう変わったか？